
コッペリアの電腦（縦書き P D F 推奨版）

えた = なる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コツペリアの電腦（縦書きPDF推奨版）

【Nコード】

N3173Z

【作者名】

えた＝なる

【あらすじ】

アルベルトは知らなかった。最愛の義妹エリスから、男女の情を抱かれている事を。エリスは知らなかった。大切に身に着けている宝物には、最愛の義兄アルベルトにより、貧者の薔薇が仕込まれている事を。幼馴染みにして義理の兄妹。そんな彼等の関係は、まだ、変わっていない。Arcadia様にも投稿しています。

第一章プロローグ「ハンター試験」(前書き)

この小説は縦書きPDFを基準に執筆しています。ブラウザで閲覧された場合、ルビ等のレイアウトが作者の意図と異なるものとなる可能性がありますので、ご留意下さい。

第一章プロローグ「ハンター試験」

昔、死にかけてた記憶がある。

念能力の修行中だった。それまで覚えは誰よりも早く、体術でも燃でも道場の誰より先んじていた。弟子が総勢十人ほどの、至極小さな道場だったけど、それでも天才の名をほしいままにしていた。念も、精孔を開く所までは誰よりも早かった。

それが、一日で崩れ去った。

精孔を開き、全身から吹き出すオーラを認識した。あとはこれを体へ留めるだけだ。四五行でいう纏の習得の修行だった。事前の座学もイメージトレーニングも完璧で、失敗するはずがないと、そう思っていた。いや、もしかしたら失敗という概念すら忘失していたのかもしれない。

結果としてオーラは一向に留まらず、一晚中瞑想しても手ごたえさえ掴めず、幼き天狗の鼻は見事に折れることになった。纏の習得どころではない。噴出する量が多すぎて生命維持さえ危ぶまれる事態だった。元通り精孔を閉じる事さえできなかつた。朦朧とする意識の中、冥府へと落ち行く実感があつた。

生命力の極端な不足で生死の境をさまよつた僕を、道場の皆は必死に看病してくれたらしい。特に師匠の娘さん、今の義妹には世話になつたらしいと、後から皆に教えられた。一週間以上もの間、昼夜問わず付きつきりで側にいてくれたのだ。

なんとか目覚めた僕に、師匠は選択肢を与えてくれた。生涯絶の

状態で暮らすか、一か八かの賭けで修行をするか。僕さえ良ければ師匠はいつでも絶にする発を修得してくれるつもりらしい。制約も誓約もどんと来い、だそうだ。この人は本当に馬鹿だ。師匠、強化系なのに。馬鹿だ。

一時間ほど考える時間をもらった後、水見式に挑戦した。我ながら無駄な事を、と今でも思う。一秒一刻が生死を分つほど危険な状態だったのに。悔しかったのかもしれない。せめて自分の系統ぐらいは知ってから、今まで鍛錬してきた念というものを捨てたかったのだろうか。練すら修得してない僕の拙すぎる水見式は師匠の強化した目でようやく分かるほど微かに葉が揺れ動いて、操作系だと判明した。

それを聞いてトスンと、憑き物が落ちたように感じたのを憶えている。

結論は、実に簡単なものだった。

一九九九年一月七日 ザバン市

嫌な夢を見た。あの頃の夢だ。生きている事が地獄で、死んでしまうのが怖くて、失われていく生命力に怯えながら必死に修行したあの当時。自分の系統が操作系とわかって、命を捨てたつもりで発を覚えて、それがなんとか形になって九死に一生を得た。

その間、多くの人に支えられた。なかでも師匠と彼女には、いくら感謝してもし足りない。

「大丈夫？ アルベルト、目が覚めた？」

見れば、隣で寝ていたエリスが心配そうに顔を退き込んでいる。僕より一つ年下の、淡い金の髪を背中に流す繊美な少女。エリス・エレナ・レジーナ。この世で最も愛しい家族の一人。

「うなされてたわよ。水、飲む？」

「ああ」

ベッドの脇にあった水差からコップに汲んで、エリスはそつと差し出してくれた。飲むと、寝汗で乾いた体に染み込んでいく。

僕と彼女はつい先日、戸籍上の兄妹になった。そのときにあった悶着は、正直あまり思い出したくない。はつきり言つて意外だった。僕と彼女はもうずっと前から兄妹同然の間柄という認識だったのだが、まさかあそこまで嫌がられるとは。

「ごちそうさま。ありがとう、エリス、もう大丈夫だよ。ちょっと夢見が悪かっただけだから」

「よりもよつて今日に？ ついてないのね。アルベルトはほとんど夢を見ないのに」

幼子を慈しむ様に僕の頬を撫でて微笑むエリス。推測だが、嫌つてる相手への反応ではないようだ。師匠が、彼女の親父さんが僕を養子にしてくれる手続きを完了したと明かされたときの般若の相とは比べ物にならない。常々思う。まったく、この世に女心ほど理解しがたいものはないものだ。師匠がエリスに、僕を名実共に本当の家族として迎えないかと確認したときは、それはもう嬉しそうな様子だったそうなのだが。

「そうだった、今日は七日か。時間は……、受付開始までだいぶあるね」

「そうね。まずは汗でも流しましょうか」

シーツを纏い、浴室へ向かうエリスを追って浴室へ入る。思えば、エリスと共に寝るのは久しぶりだった。幼い頃から兄妹同然に過ごしてきただけあって、昔は毎日だったのだが。

チャーターした飛行船でザバン市に到着後、ホテルにチェックインした時の事だった。二部屋とっていたはずの予約がなぜか一部屋しかとれてないというのだった。こちら側の手違いかとも考えたが、申し込みしたのはエリスだ。こういう事にはしっかりしてる彼女が、そうそう間違えるはずがない。

しかし、ないものはないで仕方なかった。ハンター試験を間近に控えてごった返すザバン市のホテルに余分な部屋がないのは誰でも分かる。幸い、女性であるエリスが男の僕と同室でも構わないと言っていたのだ。ならばと僕は納得して、昨夜は数年ぶりに彼女と同じベッドで眠ったのだった。

「どうかしたの？」

「うん。エリスと寝たのも久しぶりだと思ってさ。相変わらず裸で寝る癖はなおらないみたいだね」

「ふふっ、そうね。お風呂はあなたがうちに泊まる度に一緒に入ってるのね。最近、アルベルトったらせがんでもつれないんですもの」

「お互い、体が大きくなったからね。寝床が狭いと眠りが阻害される。睡眠不足はよくない事だろう？」

「もう。相変わらずなんだから」

お互いに体を洗いながら、心を預けきった者同士のたわいない会話を楽しんでいる。その根底にあるのは、きつと家族間の愛情だろう。しかし、だからこそ解せない事がある。エリスとは幾度も喧嘩をした。幼少期は数えきれないほど罵りあった。取っ組み合いに発展した記憶さえある。だが、しかし、決して、いや、だからこそ、心底嫌いになつた経験はないし、心底嫌われた経験もないと断言できる。

「エリス。いいかな？」

「真面目な話？ ええ、いいわよアルベルト」

「僕が君の兄に、師匠の養子になるのは、そんなに嫌かい？」

僕の背中を流していたエリスに、ここ数日ずっと気になっていた問いを投げかけた。即座の返答はない。エリスの動きは止まったが、しかし心を乱した気配はなかった。

「僕は今年で十九。君は十八になる。お互いまだまだ未熟だけど、責任ある判断と無縁でいられる年齢でもないと思う。だからこそ尋ねたい。そして尊重したい。お前の希望に、僕は従うとここに誓おう」

しばしの静寂の後、エリスは僕の背中に体重を預けて、呟く様に行った。

「嫌よ」

「そうか」

やっぱり、そうだったのか。なんて節穴だったのだろう。僕のこの目は。

「なら、白紙に戻そう。手続きは既にすんでしまったけど、ハンターライセンスの力を使えば融通は効くはずだから。僕達が合格したら問い合わせてみよう。今すぐが良ければ、僕から師匠に頼んでみよう。いいね？」

「だめよ、だめ。勘違いしないで。その必要はないわ。残念だけど。いまのところは……、だけど」

僕の背中に顔を埋めてエリスがいう。無理はしてない。そう感じた。しかし、本当にそうだろうか？

「ねえアルベルト、クイズよ」

「クイズ？」

「正解できたら答えてあげる。どうしてわたしが、あなたの妹になりたくなかったのか」

「ああ、わかった」

唐突だな、と僕は思った。思ったけれど口には出さなかった。エリスは僕の胸に腕を廻して、切ないほどに抱き締めていた。あまり大きくない乳房が押し付けられて潰れ、背中に鼓動が伝わってくる。僕は両の掌をこの手に取って、指と指をからませた。後ろにいる彼女はたった一つ違いのはずなのに、幼い少女のような錯覚をおぼえる。

「挑戦するよ。出題して？」

こう見えて、クイズにはいささか自身がある。半分以上は能力のおかげだけど、エリスもそれを承知である以上、遠慮なく活用させて頂こう。

「まず前提として、わたしが一緒に眠りたがる人には誰がいるかわ

かるわね？」

「……僕だけかな。エリスは師匠とは寝たがらない」

エリスが七歳の頃、師匠の寝相にベッドから蹴り落とされた事件以後は。

「わたしが一緒にお風呂に入りたがるのは？」

「それも僕だけだと思う。師匠がたまには俺と入らないかと誘った時は、冷たい嘲笑で却下されてた」

「よく見てるわね」

くすり、と笑うエリス。そして彼女は僕の前に回って、真剣な目で見つめて言った。

「わたしのファーストキスのお相手は？」

「僕、なのか？ 僕がアマチュアとしてはじめてのハントに赴く前の日の。もっとも、君からのタックル、いや、すまなかった。あの歯と歯の衝突をキスと表現するのらだけど」

念のため確認すると、ええそうよ、と肯定された。

「なら、問題よ。そんなわたしの行動は何を意味しているのでしょうか？ どう、簡単でしょう」

「うーん……。そういうクイズか」

自慢ではない。自慢ではないが僕は他人の心理の繊細な部分にやささか疎い。これも念能力の影響だ、と開き直ってしまえばいいのかもしれないけど、大切な人の心情を裏切って傷つけてしまうのを望むはずもない。

「難しいならヒントあげる。わたしが父さんの事を嫌いじゃないって知ってるでしょ？」

「もちろんさ。師匠とエリスは誰からみても仲のいい親子だよ。…ああ、なるほど」

頷いた僕の膝の上に、エリスが座った。至近距離からの見つめあい。瞳の中に宿る光は悪戯っぽくて、期待していて、だけど隠しきれない怯えがあった。

「わかつちやった？」

「うん、完璧だ。実に理論的で的確な正解を得たと自負できるよ。エリスは師匠より僕と触れあっている。だけど師匠の事は嫌いじゃない。それが意味する事はただ一つ。エリスは師匠の事が大好きなんだね」

非の打ちどころのない正答だった。人間は好きな人に素直になれない事があると聞く。仮にエリスが師匠のことをとても好きで直接的に表現できないのなら、彼女の行動は全て説明できるといえるだろう。

「……残念。間違いよ、アルベルト」

僕の膝に座ったまま、エリスの腕が頭を撫でる。あやすように、慰めるように。母が子にする仕種のようだと僕は思った。まるで、答えが外れる事は分かっていた、とでもいうかのようだった。

「ね？ 入りませう？ 体が冷めちゃうわ」

立ち上がったエリスに誘われ、湯舟の中に身を沈めた。エリス自身は僕の膝の間に入り込み、僕の体に寄り掛かる。そんないつも通

りの仕種は、しかし、この話題は当分お預け、と言外に主張していた。

「だけど、最後に一つだけ伝えたかった。」

細い肩を包み込むように抱き締め、心の内をそつと吐露する。

「エリス、女々しいけど、最後に本心を明かしたい。僕は義理とはいえ師匠の息子になれると知って嬉しかった。あの人は僕を拾ってくれた人だ。救ってくれた人だ。アマチュアハンターとして独立するまで、養い導いてくれた人だ。……だけどね、エリス。それ以上に嬉しい事があったんだ。君の兄になれた事だ」

「うん、知ってた。知ってたわ。だから、ありがとう」

そっか。知られていたのか。それは少し、恥ずかしいかもしれない。

「……ねえ、アルベルト」

「なんだい、エリス」

「もしさっきのクイズに正解できて、それでも妹になってほしいってあなたが望むなら、アルベルト、あなたをお兄ちゃんって呼んであげても、いいよ」

嬉しかった。嬉しさのあまり、エリスを抱く腕に力が入る。

「それなら、早くそうなるように頑張るよ」

前向きなはずの僕の答えは、何故だろう、エリスの肩を悲しげに揺らした。

風呂上がり、僕とエリスはそれぞれの装備を整えていた。僕の装備は特に捻ったものではなく、普段行う都市型ハントと同じ傾向でまとめてある。

服は上下とも特注品をあえて避け、大量生産の品の中から不自然じゃない程度に丈夫なものを、具体的には紺のジーンズと鼠色の長袖シャツを選択した。インナーは綿のものを選んである。

武器はワイヤーカッター付きの多機能銃剣を用意してあるが、はつきり言ってサバイバルツールとしての期待が主である。火器は発火と硝煙によるシグネチャの増加が深刻すぎるため、よほどの事情がない限り持ち歩かない事に決めている。あとはリュックに水と非常食、医療キット。各種通貨、金貨、毛布にロープなど数日間行動するために必要最低限の荷物をいれておいた。

外見上は身軽な旅行者、といった風情だろう。

武器が足りない、と思うかもしれない。だけど僕達ハンターは兵士ではないのだ。僕達にとって戦いはそれ自体が目的ではなく、ハントに際して選択する可能性のある手段の一つにすぎなかった。無論、戦闘主体のハントであれば僕も武器の選択を視野に入れる。

ところが、エリスの装備は凄かった。

黒いドレスを基調に、黒の長手袋と黒のストッキング、黒の靴。ドレスの背中は大胆に開いていて、全体的に黒い分、長い髪の毛の影から見える白い肌がたまらなく眩しい。胸元には古い古いネックレス。球形に磨いた翡翠を一つ、首から下げただけのシンプルなもの

のだった。聞くと、これは亡くなった母親の品だそう。そういえば、エリスの母親は彼女の出産と引き換えに他界していると師匠から話を聞いている。最後に髪を僕に結び上げさせて、帽子を冠ればエリスの装備も完成だった。

断言しよう。エリスは別にふざけてない。

ハンターには大きく分けて二種類いる。常識的な方法でコツコツと地道にハントする奴と、絶大な能力やバックボーンに物を言わせて短期間で獲物を手に入れていく奴。優劣の話ではない。傾向の話だ。

アマチュアとして僕が経験してきたのは前者のハント。ところが、エリスには後者の才能しかない。

そもそも、エリスにはアマチュアハンターとしての経験はない。それどころか体術の技量すら一般人並、護身や教養の範囲内だ。ハンター志望者として見た彼女のアドバンテージはひたすら念能力に片寄っている。あえて言葉を選ばなければ念能力馬鹿だ。逆にいえばそれだけで師匠が受験を許可できるほどの才能があり、他の全てを捨てても念能力に専念しなければならぬほどの才能をもって生まれてしまったという事でもある。

だからこそ今回のハンター試験で、エリスは念能力でぶつちぎるしか道がない。この服装はその覚悟を自他に示す象徴であり、念能力の邪魔にならないためのものでもあった。

もちろん、僕もエリスを全力でサポートするつもりではある。が、試験官が見たいのはあくまでエリス本人だろう。僕の隣にいる少女、なんてものではないはずだ。必然的に個人の素質を試す試験内容が

あるだろうし、そうなれば僕のサポートにも限界はある。それでも、是が非でも彼女にはライセンスをとってもらわなければ困るのだ。

そして、もし……。

「エリス、最後にこれを。師匠と僕からの贈り物だ。ハンターを目指す君の旅路に、お守り代わりに添えてほしい」

この時、僕は罪を犯した。

手渡したのは青く輝く卵だった。大きさは鶏のものより少し大きい。約一千万年ほど昔に生息したと言われるヒスイクイドリの卵の化石。破片や状態の悪い物を含めてもここ五百年間で五十個未満しか発掘記録がない希少品だった。贗作も多く出回っているが、もし本物を手にした者は類い稀なる幸運を手に入れるという伝説がある。

説明と一緒に携帯用のポシエットも渡す。ヒスイクイドリの卵がちょうどぴったり収まる大きさと形で、黒く上品な皮製で所々銀系の装飾が入った特注品だった。専門の強化系術者によって自身と中身を保護する念までかけられている。

分かっていたはずだ。渡せば絶対に後悔すると。

感激して、抱きついて喜びの言葉を口にするエリス。そんな彼女の前で不審な態度を取らないように、僕は全身の動作を抑制する。罪悪感で引き裂かれる本心は体の置く深くへと沈んでいった。お守り代わり、僕の口からそう言えばエリスは決して手放すまい。

もしも、これに貧者の薔薇が仕込まれてなかったら、仕込む必要がなかったら、どんなに幸せだっただろうか。

第一章プロローグ「ハンター試験」（後書き）

【無色透明な黒色塗料 具現化系】
ファントム・ブラック

使用者、アルベルト・レジーナ。

「黒い塗料であること」という概念以外の性質を持たない物質を具現化する。

質量も体積も存在せず、人体にとって毒にも薬にもならない。能力者から離れると著しい速度で劣化を始める。

第一話「マリオネットプログラム」

「やあ、キミ達も使えるみたいだね」

地下通路に入って早々、にこやかに近付いてきたのはヒソカと名乗るピエロだった。こういう奇抜な格好をするハンターは、プロアマ問わず時々見かける。その大半が何かを勘違いした駆け出し連中だが、もしそうでなければ相当の猛者である確率が高い。並み大抵の者が激しい自己主張を試みても、あつという間に潰れるのがオチだからだ。

そして、目の前の男に限って前者であるはずがない。なぜなら、オーラが、やばすぎる。

ビリビリと肌を焼く禍々しい邪気。

内心で舌舐めずりしているのだろう。濁りきつた視線が僕とエリスの全身を舐め廻す。男性器が盛大に勃起していた。まずい。欲望に素直な奴の念は手強い。この男を動かすのが食欲か性欲か別の何かは知らないが、とにかく片手間にあしらえる相手じゃない。僕は常駐タスクの自動防衛管制を呼び出し警戒度を3/6「嚴重警戒」に引き上げると、隣にいるエリスの肩を軽く抱いた。

「どうも。アルベルト・レジーナです。こいつは妹のエリス。あなたも受験生ですか？」

「ククツ、そんなに警戒しなくてもいいじゃないか」

「よろしくね、ヒソカさん」

「呼び捨てでいいよ」

差し出される手をあえて無視して、エリスの肩をそつと押した。

「エリス、僕はヒソカともう少し話をしたい。その間、せっかくだし、自分一人でこの場の空気を感じておいで。これもハンターの勉強だよ」

「そうね、アルベルト。お言葉に甘えてちょっとその辺回ってくるわ」

「あ、待った」

「え？」

「いいかい？ 拾い食いはいけないよ。知らない人にもついていっちゃ駄目だよ。飴ちゃんあげるって言われてもちゃんと断るんだよ？ いいね？」

「分かったわ、心配しないで」

くすつと笑って他の受験者たちがいる方向へと向かうエリス。
…さて、どうしたもんか。

「仲のいい兄妹じゃないか」

「ああ、もちろんさ」

ヒソカの瞳からは、出会った瞬間のぎらついた欲望は影を潜めてるように見える。が、だからといって油断できるほど余裕はない。僕的能力は比類なき応用力を誇ると自負してるが、その分、致命的な弱点がある。

「彼女、ボクに気付かなかったみたいだね」

「あいつはその部分の経験が足りなくてね。なまじ素質があるだけに害意のあるオーラにも苦にせず向き合えるから、どう経験を積みませたらいいか困ってる」

「いいのかい？ ボクにそんなこと話しちゃって」

「すぐにばれるさ。いや、もうばれてたよね」

楽しみに、喉を鳴らして笑うヒソカ。

「彼女もいいけど、君もいいね。オーラの流れがたまらなく静かだ。これだけ挑発してもさざ波さえ立たない」

「そういうアンタは禍々しいな。僕と戦いたくて仕方がないってオーラしてるよ。バトルマニアによくあるタイプだ」
「さて、どうかな」

しかしその目は肯定していた。

そのあとしばらく、取り留めもない会話をして、ヒソカという男の性格は大体把握した。酷く気分屋な戦闘狂。差し当たり、今すぐ戦う事はないだろう。今はそれで十分だった。ついでに携帯電話の番号も交換しておいた。実力者なのは確かなので、何かに役立つかもしれないから。

ところでエリスはどこにいるのだろうか？ ヒソカと別れてしばらく会場をさまよった僕が見つけたのは、ピンクの帽子を被った少女と話題を弾ませる妹の姿だった。声をかけて邪魔したくはなかった。同業者の友人が増えるのはいい事だ。ハンターにとって、人のつながりはそれだけで強力な武器になる。

第一次試験は耐久走だった。サトツ、という試験官の後ろについていくのは、はっきり言って退屈すぎる。エリスも件の少女と一緒にいるわけだし、ここは少し休憩してもいいかもしれない。体内の乳酸操作の優先順位を上げ、自動防衛管制を2/6「通常警戒」に

設定し、エリスの様子をオートで監視するスクリプトを即行で仕上げて走らせてから、僕は自分の能力の世界に埋没した。

半径三十メートルほどの球形の空間の中心に浮かぶ椅子に腰掛ける。ここは念空間というわけではない。自分自身をコントロールする僕の能力、【コツペリアの電脳】マリオネットプログラムが神経系を操作する事で形成した、いわば高度な自己催眠による白昼夢だ。

脳内管制空間の脳内指令席に座り、視覚情報を脳内球形スクリーンの背景設定に。正面の脳内メインスリーンには以前見て記録領域にストックしてある映像作品のリストアップを展開する。ついでに脳内アイスコーヒーと脳内ポテチを出現させた。カロリーもなければ腹も膨れない、いくらでも調達できて値段もただ、いろんな意味で夢の飲食物だ。いや、満腹感は満腹感で自由に操作できるのだが。

ポテチを摘みながら映画を眺める。手元に浮遊させている情報ウインドウにはエリス監視スクリプトからの情報がリアルタイムで入ってくる。どうやら心配していたような問題はなさそうだ。肉体が一般人としては鍛えているというレベルでしかない彼女は莫大な生命エネルギーにまかせて持久走を続けているわけだが、しょせん肉体は肉体、念は念。オーラで肉体を補う事は可能だが、弱い肉体ではその真価を発揮するのは不可能だった。戦闘型強化系を極めた連中が見せるような人外の領域にある怪力などは、肉体とオーラの両方を研鑽した果てにあるものだ。だがそれでも、この程度のスタミナ維持ならなんとでもなるらしい。理論では分かりきっていた事だが、いい結果だった。

そうになると、残る問題はただ一つ。エリスの大胆に開かれた背中や走る度に揺れる尻を彼女の真後ろで美味しそうに眺める変態ピエロ口だけか。さっきまであの位置は大勢の野郎共が壮絶な争奪戦を繰

り広げていたはずなのに、今では奴一人が占有していた。

ちらりとメインウィンドウに目をやる。全裸で銃を振り回す刑事が麻薬の売人をばったばったと蹴散らしていくシーンだった。いいところなのだが仕方がない。映画と大切な妹で比べ物になるはずもなく、僕は管制空間からの離脱を選択した。

「ヒソカ、ちょっといいか」

「やあ。お兄様のお出ましかい」

軽口を叩く道化を制して、僕は耳元で囁いた。どうでもいいが、あまり頻繁に接触していると僕もこの奇術師と同類に思われやしないだろうか。

「エリスに戦闘を仕掛けるな、とは言わない。……いや、大いに言いたいが今はそれとは別の話だ。いいか？ 仕掛けるなら大災害に巻き込まれるぐらいの覚悟をしろ。軽い気持ちで味見するのは、やめてくれ」

「そんなに凄いのかい？」

「ああ。忠告はしたぞ」

期待に震えるヒソカを見る。やはり説得力はあったようだ。エリスの纏をじっくり見れば、よっぽどの初心者じゃない限り分かるはずだ。その奥に、「何かが」潜んでいる事を。

この忠告で手を引いてくれる事を、僕は全く期待してない。思う存分戦えるとおきの機会まで、じっくりと楽しみにしていただければそれでいい。そのとおきがおき来る前に、機会を見て僕がヒソカを潰す。できるかできないかじゃない。やる。ただそれだけだ。

「いい目だ。妹が関わると好戦的になるようだね、キミは」

トンネルを抜けると湿原だった。

又レーメ湿原。別名を詐欺師の壻というらしい。ランニングの試験はまだ続くようだ。試験官の説明を遮って乱入した猿は、サトツ自身の攻撃によりあっという間に正体を現し退散した。そんな茶番も、この湿原の特性を一目でわからせる寸劇としては悪くなかった。だけど。そんなことはどうでもよかった。

ヒスイクイドリの卵には発信器も一緒に仕込まれていて、僕の携帯画面から確認できる。エリスに先にゴールに辿り着いてもらえば、試験官から逸れても到達できる寸法だ。

機会が来た。こんなに早く。絶好の好機が。

「いいか？」

「もちろん」

隣も見ずに確認して、内容も聞かれずに了解された。

エリスにはサトツのすぐ後ろをぴったりと追うよう、既に携帯で言い含めてある。湿原で靴が汚れると愚痴をこぼしていたが、それも余裕がある証だろう。

長く思い描いてきたハンター試験だからだろうか。柄にもなく熱くなりすぎてる。自覚はある。それでも。

やがて受験生達がどかどかと走り去った。並んだまま微動だにしない僕とヒソカ。何人かが怪訝な顔で眺めていた。試験序盤から必要以上に目立ってしまった事になるが、それを気にしている余裕は既になかった。

リュックを地面において、ナイフを鞘ごと腰につける。

「ヒソカ、胸を借りるぞ」

二人だけが佇む地下道出口で、僕は分かりきった宣言をする。

釣り上がった唇が応えだった。

【マリオネットプログラムコッペリアの電腦】。

この能力は万能だ。およそ、人間が可能な行動なら何でもサポートしてくれる。人間の生命力を原動力にした念という技術は、それ故に人間自身に対して最も効果を発揮する。僕の能力はそれを更に突き詰め、自分自身の念が最も効果を発揮する人間、すなわち自分自身を相手にする事に特化したものだった。自分の体という愛着溢れる道具は、操作する対象としても絶好だった。

加えて、神字によるサポートがある。【ファントム・ブラック無色透明な黒色塗料】は、体内に効率的に神字を描くため編み出した能力だった。自分のオーラに満たされている場所ならどこにでも出し入れ自由なこの塗料なら、体の中といえど自在に神字を描く事が可能だった。自分の体は一生活き合いどこにでも持ち運ぶ道具だ。手塩にかけすぎて困る事はない。

しかし、この能力は全能ではなかった。

並行して疾走する。ヒソカの堅はたまらなく美しい。力強さもさることながら、弾けるほどの躍動感、歓喜に踊る未熟な歪さ。機械的に精密な堅しかできない僕には生涯辿り着けない、あまりにも価値ある「無駄の極地」だ。

「どうした、おいでよっ」

挑発する奇術師を黙らせるよう、牽制の念弾をばらまいた。当然の如く避けられる。それでいい。その一瞬の隙を狙って、次手を打つ。出し惜しみするつもりはさらさらなかった。

瞬間的にオーラを超圧縮し、人指し指の最先端で極小の硬、念弾としてそのまま放出。狙うは眉間、速さは閃光。だけど、それが当たるかどうかはどうでもいい。待機させていた戦闘用体術タスクを最大レベルで実行。全身がオーラの隷下に入った。単純な肉体強化とは訳が違う。腱、筋繊維、骨格、血管、神経系。その他全てを個別かつ総合的に強化し操作する。

これまでとは違う速さでヒソカの懐へ入り込む。勢いを載せて鳩尾に拳を叩き込み、インパクトの瞬間に硬。即座に解除して全身の強化。浮き上がるヒソカを捕らえて湿原の地面へ頭から投げ落とす。バウンドする頭部。そのちょうど中心を捕らえ、サッカーボールの要領でトゥーキックを想いつきり振り抜いた。腰を中心にゆっくりと回転しながら飛んでいくヒソカの体。それは玩具のように空を舞って、着地後、二度、三度と弾んでから、ようやく止まった。

そして、ぞくりと、恐怖した。

ヒソカは倒れたまま動かない。オーラが増したわけでもない。実のところ何一つ変わってない。マリオネットプログラムもなんら異常を報告しない。ヒソカはなにも変わってない。ただ、理解した。僕は今、自分の中のどうしようもなく本能的な部分で、生物としての原初の恐怖を味わっているのだと。

その恐怖の名を、未知と呼ぶ。

ゆっくりと、まるで気怠げにゆっくりと、ヒソカの体が起き上がる。

ああ、なんて。

なんてきれいな、微笑みだろう。

僕の能力は二つしかなく、実質的には一つしかない。なおかつ、マリオネットプログラム【コッペリアの電腦】には本質的で致命的な弱点が存在する。

系統ごとの念能力による戦闘は大きく二つに大別される。己の肉体を強化するのは強化系やそれに近い系統が得意とする戦い方だ。一方で特質系側の系統は百花繚乱の特殊能力でそれに対抗する。言い方を変えれば正攻法に強いのが強化系側、裏技を得意とするのが特質系側と表せるだろう。

しかし、操作系である僕の能力は裏技がない。必然的に正攻法、

苦手な系統の戦法で勝負を挑む事になる。確かに精密さは比類ない。小器用には戦える。しかし小器用なだけだ。端的に言って、僕の念には破壊力が足りない。それが致命的な弱点だった。

この欠点は、特に格上の相手と戦う際に決定力不足として表面化する。推測はしていた。実際戦って、短いやり取りだが嫌というほど確信した。ヒソカは紛れもない格上だった。

しかし、負けるつもりはさらさらない。それでも、この化け物を倒すには決め手がある。強力な正攻法か、必殺の裏技が。

僕的能力には、どちらもない。

ヒソカの足音が、近付いてくる。

第一話「マリオネットプログラム」（後書き）

【マリオネットプログラム
コックペリアの電腦 操作系】

使用者、アルベルト・レジーナ。

能力者自身を機械に見立てて精密に制御するための能力。

身体内部のオーラを使用するため絶の状態でも稼働する常時発動型。事前にプログラムを組めば複雑な操作もオートで可能だが、過剰な処理による負荷は脳にダメージを与える危険がある。

第二話「赤の光翼」

「やるじゃないか。驚いたよ」

頭からぼたぼた血を垂らしながら、異形の奇術師は楽しそうに笑う。とても綺麗な笑顔だった。無邪気でおぞましく純粹だった。今の彼を人間と呼ばないのなら、一体誰がそうなのだろう。

「でも、そうだな。大体分かっちゃった。君のそのオーラ、戦いの最中なのに整いすぎてるよね。そう、不自然なほど。そういう能力なんだろう？」

圧倒的な戦闘センス。異常なまでの慧眼。こと、戦いという一点に限っては、ヒソカのポテンシャルは今まで会った誰をも凌駕している。

しかし、それでも。最善を尽くす。僕はやるべき事をやるだけだ。

最低目標として、このピエロを試験から排除する。最悪はそれでいい。エリスに最後まで付き合えないのは残念だが、元々僕の合格は次善目標なんだ。師匠と幾度も話し合って決めた最優先目標は、エリスにハンターライセンスをとらせる事。プロハンターという確固たる立場を手に入れさせ、人類が彼女を踏み潰す可能性を少しでも減らす事だった。

エリスという少女を辺境の田舎町に隔離し続ける期間は、もう十分に長すぎた。

周囲を見渡す。使えるものは全て使おう。腰元のナイフは恐らく

無駄だ。本職の強化系ならともかく、操作系な上に自分の体の強化に特化した僕の周では、このレベルの男には通用しまい。いや、むしろはつきりと足手纏いだった。

「今度は、こつちからいくよっ！」

強化されたトランプが飛来する。その軌道計算を自動防衛管制にまかせ、僕はヒソカの観察に専念した。どうにかして突破口を探さなければいけない。僕の能力で格上の能力者と戦うには、どうしたって頭脳勝負や裏のかきあい以て勝つする必要があった。

「どうしたっ？ 逃げてばかりかいっ？」

よく喋る道化だ。余裕があつて羨ましい。僕はステップも自動防衛管制にまかせてある。勝つ道筋が浮かばないのに逸つても負けるだけだ。僕のオーラは気合いや根性では絶対に増えない。逆に落ち込んでも絶対に減らない。【マリオネットプログラムコッペリアの電腦】が動作し続けている限り。

ヒソカが距離を積めてくる。操作系の僕は放出系の戦いのほうが得意だが、あまり距離を開ける事にこだわっても選択肢が狭くなるいっぽうだ。それに、近付いてみれば見えるものもあるかもしれない。僕は自動防衛管制に接近戦闘を命令し、同時に緊急離脱プログラムのタスクを立ち上げた。

唸り来る拳をいなす様にかわし、続く上段蹴りを紙一重で避ける。しなやかな柔軟性。パワーを秘めた体躯。まったく、ヒソカの肉体の性能は舌を巻くほど素晴らしい。

「そらっ、捕まえたっ！」

異常警報が出されたときには遅かった。ヒソカの左ジャブをガードした腕に、彼のオーラが張り付いていた。あからさまに怪しい。分析より先に緊急離脱プログラムを実行した。両足が地面を次々と硬で蹴り、一瞬で数十メートルの距離をとる。

「やあ、また会ったね」

が、目の前にいたのはヒソカだった。移動したのは僕だ。僕の腕とつながったまま伸びたヒソカのオーラが突然強力に収縮して、離れた距離を一気に引き戻された。

「ぐっ！」

出迎えた拳に思わず息が漏れる。顔面を殴られ後頭部を地面に打ち付けられた。その顔面にオーラが張り付く。その事実を認識するより遥かに早く体が浮いて、今度は全力の左ストレートに迎撃された。

凄まじいラッシュが始まった。やむをえず痛覚を遮断する。これで体の異常は無機質な情報でしか得られなくなったが、今はそれも仕方がない。怒濤の如く繰り出される重い衝撃を直で味わって、冷静でいられる自信は僕にはなかった。

自分の肉体が壊されていく光景を冷静に眺めるのは妙な気分だった。拳の当たる瞬間、該当箇所を硬をあわせるのだが、それでも衝撃は殺せない。その上、ヒソカの体術の変化自在さに、数発に一発軌道予測が超越される。それには硬が間に合わず、堅のまま耐えるしか術はなかった。

あちこちの骨にヒビが入り、折れ、少しずつ少しずつ砕けていく。内臓がいくつも機能障害を報告している。自己修復プログラムに廻すオーラがない。防御だけで精一杯だった。

しかし、仕掛けは分かった。ヒソカの体から伸びる粘着力と弾性に富んだオーラ。それこそがこの男の能力だろう。十中八九、変化系。強化系との相性は僕より一段高い上に、彼の能力は嫌になる程よくできてる。

内心で憂鬱になりながら変化系総合制御を立ち上げ使用するタイプを選択。指を覆うオーラを鋭利な刃に変えるプログラムだ。タイミングを見てそれを発動させ、ヒソカのオーラを断ち切って離脱した。残存オーラが急激に減る。僕にとって最も苦手なのが変化系だ。ヒソカほどの能力者に対抗できる切れ味が、何度も出せるはずもなかった。

追撃が来る前にさらに後退。浮遊ウィンドウを幻視し設定を変える。

自動防衛管制、5 / 6 「緊急最大警戒」。

この設定は脳に負担をかけるため五分以内の使用を推奨します。五分経過後に自動的に終了しますか？

はい / いいえ

はい。

全感覚遮断、アラート管制、重要損害レベル4まで無視。

警告レベル5以外の全ての重要損害を無視するように設定しました。

「オーバークロック1」始動。

この設定は脳に著しい負担をかけるため五分以内の使用を強く推奨します。五分経過後に自動的に終了しますか？

はい/いいえ

はい。

ギアが上がった。脳の処理速度が加速する。頭部に血液が集中する。奥歯を強く噛み締めた。オーバークロックは真正銘の緊急手段だ。命の危険も確実にある。だが死ぬつもりはない。死んでやるはずがない。死んでたまるか。

「いいね、やればできるじゃないか」

何かが変わったのが分かったのだろう。間延びして聞こえるヒソカの言葉には答えずに、今度は僕から積極的に間合いを積めた。

あの粘着性のオーラはとても手強い。が、ヒソカの体捌きの鋭さでは、遠距離からの放出系では埒が明かない。僕の念弾程度がそう簡単に当たってくれる相手じゃなかった。

身の丈ほどもあろうかというガム状オーラの迎撃を避けると、その裏には拳を振りかぶったヒソカがいた。

剛腕がゆっくりと唸り来る。それをゆっくりと紙一重で避ける。風を切る音すらとても遅い。なにもかも減速したこの世界で、僕の思考だけが加速していた。続いて炸裂する怒濤のラッシュに、防衛も反撃もせずにポジション取りに専念する。オーバークロックだからこそ可能な捌き方。唇を引き締める。何かを狙っている事はばれ

てるだろう。果たして見破られる前に決められるか。今だ。

前方広範囲に【無色透明な黒色塗料】ファントム・ブラックをぶちまける。どうせこんなものはすぐに消える。稼げる時間は刹那以下。だけど、それだけあれば今の【コツペリアの電腦】マリオネットプログラムは大抵の処理をなしてしまえる。

右手の人指し指に直径1cmの超高密度念弾が出現する。普通の念使いでは為せない凝縮密度。それを実現させる僕的能力も異常なら、当然の様に避けるヒソカも異常だ。しかしさすがに体勢は崩れた。そこを狙い、しがみついて首筋に噛み付いた。噛み切るためではない。固定するためだ。口の中には、溜めに溜めた渾身のオーラがある。

絶対に避けられない密着距離。ヒソカ的能力は、少なくとも粘着性のあるオーラは、この状況で全く役立たない。僕は勝利を確信して、迷うことなく念弾を、ぐっ……！！？

一瞬の異常。それが何かを致命的に変えた。噛み付いていた首筋はどこかへ消えた。射出された念弾は湿原の風を切り裂いて、遠方へ虚しく飛んでいった。

体の浮遊を感知し、状況把握を試みて理解した。

あの時、ヒソカは避けるでも防御するでもなく、強烈なボディーパーで体軸を僅かにずらしたのだ。大部分のオーラを使い果たし、宙に浮き無防備な僕の腹部を、ヒソカは思いきり蹴飛ばした。

飛んでいる。冗談みたいにゆっくりと、空を。オーバークロックの悪影響か。増強された処理速度の無駄遣いも甚だしく、地面に激突すらする前に体のダメージを伝えてきた。浮遊ウィンドウがオー

トで開き、致命的損害を知らせるレベル5のアラートがいくつも踊る。視界が赤文字で埋まってしまう。邪魔だ。

アラート管制、重要損害レベル5無視。

全ての重要損害を無視するように設定しました。

自動防衛管制、0/6「無警戒」。

「オーバークロック2」始動。

この設定は脳に重大な損害を 警告スキップ
いいえ。

空中で姿勢を制御する。地面に激突している暇はない。地上のヒソカと目が合った。ひどく嬉しそうな笑みだった。そして、どうしてだろう。僕も笑っていると実感できた。高度統制中、表情が変わる事はないはずだけど。

まあ、それも悪い気分ではない。着地して四肢を確認する。動く。今はそれだけで十分だった。ヒソカを見遣る。何も言わず、笑っていた。同感だ。言葉はいらない。ただ、拳があればそれでいい。

瞬間、湿原を真紅の閃光が貫いた。

ヒソカと僕のちょうど中間。地面が綺麗に陥没している。新手ながら相手をしている余裕はない。即座に発射位置を座標計算。眼球を望遠モードで強化し、稜線近くの空を観測する。

エリス。背には眩しく輝く一対の赤い翼が。忌わしくも美しい、太古の悲願の結晶が。

意識があつたのはそこまでだった。ブツンと電源が落ちるような不自然な暗転。どうやら、オーバークロック2を実行するには、オーラの残量が足りなかつたらしい。

「目が覚めた？」

気が付けばエリスが心配そうに覗き込んでいた。馴染みのある感触だった。エリスの膝を枕にしているようだ。ここはどこかと聞いてみると、二次試験会場前の木陰だと帰ってきた。

「エリス、帽子は？」

「どこかに落としちゃったみたいね」

嬉しそうに目を細めて俺の頬を撫でるエリス。そうか。彼女が気にしていないならそれでいい。

「ヒソカは？」

「彼なら、あそこよ」

エリスに頭を持ち上げてもらって視線をやると、さっきまでやり合っていた奇術師がいた。目が合ってニコニコと手を振られたが、無視だ。返答しようにも腕が動かない。

自己診断が全身のダメージを次々と報告している。メッセージウインドウの表示は顔をしかめるような内容ばかりだった。これでは、少なくとも数日間は痛覚を接続できないだろう。自己修復プログラムをフル稼働させる羽目になりそうだった。

エリスは何も言わない。そつと撫でてくれる手の感触が心地よかった。赤くぼんやりと輝く掌から、優しく暖かい匂いがした。微かだがオーラが回復していた。

力を抜き、ごろりと寝転がって景色を眺める。空と梢とエリスだけが占める視界。

今はなにも考えたくない。

根源的な欲求は全て能力で統制しているはずだが、何故か眠気を感じた気がした。無論、現状で休息に異論はない。次の試験までのしばしの時間、このまま寝かせてもらう事にした。

第二話「赤の光翼」（後書き）

【セラムウムウイング
色なき光の三原色 特質系・具現化系】
使用者、エリス・エレナ・レジーナ。

赤の光翼

具現化した光に

緑の光翼

青の光翼

長い
敗作。

をかけて鍛えられた、

ための能力の失

第三話「レオリオの野望」

リュックをなくした。気付いたのは仕留めた豚を焼くときだった。たぶん、湿原の地下通路出口に置いてきたままなんだろう。残ったのはナイフと携帯電話だけで、替えの下着までなくしてしまったのは、何よりもエリスに申し訳ない

あれだけ激しい戦いでも、携帯電話は壊れてなかった。頑丈さを第一に選んだかいがあったのだろう。こうでないと、貧者の薔薇を起爆する時、電話を探して右往左往する羽目になりかねない。それではあまりに無責任すぎる。

仕方なくよく乾いた枯れ木と落ち葉を探し出して、原始的な方法で火を着けた。まあ、これ自体は大した手間じゃない。能力で無理矢理動かしている体にも負担ではなかった。グレイトスタンプを仕留めるのはエリスが二人分やってくれたし、僕の方が彼女にサポートされてる気になってくる。

そうして前半戦を難無くクリアすると、元気な少年二人組に話し掛けられた。

「あら、ゴンくん」

「ん？ 知り合いかい？」

なんでも、僕がヒソカと戦っているとエリスに教えてくれたのが彼等らしい。特にゴンという少年は人間離れた野生児で、その優れた聴覚で戦闘の様子を大まかに把握できたそうだ。そうであるならば彼等は僕の命の恩人という事になる。

「そうだったのか。ありがとう。君達のおかげでこうして生きてる」

「わたしからももう一度お礼をいうわ。本当に、ありがとう」

「うん、どういたしまして」

「あんた、すげーな。あのヒソカと戦ったんだろ？」

キルアという少年は言葉とは裏腹に、自分に対する自信に満ちあふれていた。『あんたもすごいが、オレもすごいよ』と、内心はそんな所だろう。そしてそれは確固たる実力に裏付けられての事らしい。この歳でこの体裁きができるとは未恐ろしいにもほどがある。

陰と陽に別れてるとはいえ、二人とも、戦慄するほどの才能だった。

二人と話してるうちに試験官の説明が始まって、どうせだからと、二次試験後半は一緒に挑戦する事になった。彼等曰く、仲間がもう2人ほどいるらしい。

「どうも、はじめまして」

「よっしゃ！ ゴンでかした！」

常識的な挨拶をするクラピカ、ガッツポーズをとるレオリオ。彼等とも一通り自己紹介をすませ、試験の攻略に取りかかった。いや、取りかかろうとしたのだが。

「なあ、アルベルト。お義兄さんって呼んでもいいか？」

肩を叩かれ、いい笑顔のレオリオに尋ねられた。もう片方の手でサムズアップ。彼の意思はよく分からないが、とりあえず僕も返しておく。

「別に呼称にはこだわらないから構わないが、どうしてか聞いてもいいかい？」

「おいおい、つれないな。素敵な妹さんじゃないか」

ちらりとエリスを見るレオリオ。

僕とレオリオ以外の面子はといえば、クラピカを中心に、酢と調味料を混ぜた飯に、とか、新鮮な魚肉を加えた、とか、魚？ 川から捕ってくつか、とか、あーだこーだと議論している。その中に混ぜられているエリスは目立っていた。確実に周囲の視線を集めている。大多数が男で占められたこの試験で、ドレスで着飾った少女がいれば当然のことだ。

なるほど。僕を義理の兄と呼びたいというレオリオの言葉の意味は分かった。それが吊り橋効果だろうが掃き溜めに鶴だろうが、魅力的に見えれば求愛する。年中通じて繁殖期の人間には、いかにもふさわしい行為だろう。パツと見、レオリオは不潔そうな風体でもない。衛生面の問題はないと推測できる。性格も、個人的には好感が持てる。

「エリスの同意があれば異論はないよ。まっけてくれ。本人に尋ねてくる」

「あ、おい！ ちょっと！」

僕に恋愛感情はない。肉体が本格的な生殖本能に目覚めるより早くマリオネットプログラムを身につけてしまった影響で、性欲とそれに起因する異性間の愛情や子孫を残したいという願望が実感として理解できない。これは他の生理的欲求とは根本的に異なっている。食欲や睡眠欲は昔の事とはいえ、実感として理解していた頃のデータを再現可能状態で保存している。単に念能力で統制しているだけ

だった。

しかし、性欲は前提が違う。知識では知っていても実感できない。僕に分かるのは幼児的な好きか嫌いかという単純な好意と、その強固なものとしての家族愛だけだった。しかし、だからといって他人の恋愛感情を否定するつもりはさらさらない。エリスがレオリオとの生殖行為を望むのであれば、僕は喜んで祝福しよう。

「エリス、レオリオと恋愛してみるつもりはないか？」

「レオリオさんと？」

突然の提案に戸惑ったのか、エリスは目をぱちぱちと瞬かせ、やがて何かに思い当たったのか、レオリオを招き寄せて内緒話を始めた。ぱりぱりと頬をかいて困ったように話すレオリオ。合点がいったのか、クスクスと笑うエリス。ちらりと僕の方を見たその目は、困った人ねと言ってるようだった。

「アルベルト、レオリオさんはお友達よ？」

「つまり、恋愛感情に発展する可能性は低いという事かな？」

「ええ、そうね。ごめんなさいレオリオさん。アルベルトが失礼な事を言ってしまった。こういう人なの。悪気はないからゆるしてあげて」

「ああ、僕に悪気はなかったけど、もし不快になったなら謝罪したい。すまなかった」

「お、おう」

僕が頭を下げると、レオリオは困惑した表情ながらも許してくれた。気のいい人のようにだった。

「でも、何でまた突然そんなことを？」

「うん、エリスもそろそろ年頃だと思いだったからね。世間的には、いい男は早めに捕まえておいた方がいいそうだよ。見る限り彼はいい男だ。少なくとも僕は好みだと思う」

「アルベルトの好みにまかせたらヒソカみたいな人と結婚しなきゃならないじゃない。それに、いい男ならもう捕まえてるのよ」

「そうか。知らないとはいえすまなかつたね。エリスの選択なら間違いないだろうけど、兄として顔ぐらいは知っておきたい。今度僕にも紹介してくれないかな」

「そうね。考えておくわ」

腕に抱きついてにこにこするエリス。頬が少し赤い。腕に伝わる心音などの諸元からは、体長不良というわけではないようだった。

「どうした？ 急に抱きついたりして」

「捕まえてるのっ」

「そうか」

意味はよく分からないが、エリスが満足ならそれでいい。

「諦めるレオリオ」

「ありやぜってー無理だっつて」

ところで、クラピカとキルアはなぜレオリオの肩を叩いているのだろうか。ゴンに視線で尋ねても困ったように目を逸らされた。

いつまでも関係ない話題に花を咲かせているわけにもいかない。ニギリスシの試験は一見して料理の知識を問うものだが、その内実は典型的な情報ハントだった。試験官のちりばめた情報を頼りに未

知の料理という名の獲物を捕獲せよという事だろう。流石はシングルハンター。いい試験だ。エリスに経験を積ませるにもちょうどいい。

僕達は多人数の利点を活かすため役割分担を決め、30分後に合流する事にした。具体的な分担は、ゴンとレオリオが魚の調達、残りの各自が各々情報を集める担当だった。

そして、三十分後。

「酢と調味料を混ぜた飯に新鮮な魚肉を加えた、っていうところなるよな」

キルアが持つ皿にこんもりと盛られたのは、刻んでソテーした魚肉を飯に混ぜたものだった。試食してみたが味は悪くない。メンチのもつ皿に注がれていたのと同じ、大豆の醗酵ソースをかけるとうまかった。冷たい飯と温かい魚肉ソテーの温度が混じりあうのが気になったが。

「いや、それだと試験官のスタイルにあわない。料理を待つ格好を見るに、恐らく完成品は一口大だろう」

クラピカの指摘はもつともだ。僕は自分のデータベースの中から、使えそうな知識を提供する。

「ジャポン発祥の携帯食にオニギリライスボールというものがあつたはずだ。こうやって、ご飯を握り固めて手で持って食べるらしい。サンドイッチみたいなのかな」

「よし、やってみよう」

ゴンが怪力を活かしてぎゅっと握る。たちまちのうちに空気が抜け、かつて飯だった塊が残った。なるほど。ニギリスシという名にふさわしい。

が、まずい。食感がやばいぐらいネチネチしてる。

「握りすぎじゃないかしら？ もっと量を少なくして、軽く握る感じにしてみたら？」

エリスがいう。彼女の料理の腕はかなり高い。そんなエリスの直感なら、かなりの信憑性があると見ていいだろう。

「だーかーらー。お前ら、レオリオスペシャルを無視するなよ」

「却下だ」

「明日がありますよ、レオリオさん」

「えっと、あはは……」

「っーかそんなに自信があるなら勝手に見せに行けばいいじゃないかよ」

「おう、行つてくらあー！」

「……あれって、中身は寄生虫だらけだけどね」

ちなみに僕が試食した実体験である。食べたのが消化器内に円を展開したり体内に向けて念弾を飛ばしたりできない人間なら確実に大騒ぎになっていたと思う。あれ食わされたら試験官ぶちきれんじゃないかな。

「ま、それはそれとして。やっぱり全体的に温くなるのが気になるね」

「素材が魚って前提は間違ってるの？」

「大丈夫だ、恐らく間違いないだろう。先ほどからマークしている

ハンゾーという受験者だが、彼が調達した食材は明らかに魚に片寄っている」

クラピカの視線の先には、キョロキョロしながら必死に笑いを堪える受験者がいた。彼は先ほどからずっとあんな感じだ。きっと、本人は知らない振りでもしてるつもりなんだろう。

「なんかもうさ、あいつ拷問しちゃうのが手っ取り早くねーか？」

キルアが僕とハンゾーを交互に見ながらいう。相当頭に来てるようだ。その気持ちは分かる。そういう意味で頼りにされてもあまり嬉しくなかったりするが。

「うーん。いつそ魚とご飯をわけてみるのはどうかな。こんなふう」

ゴンが掌の上に握りこぶしを置いて提案した。魚肉の上に握った飯をのせるというのだろう。いいアイデアだ。加えるといっても、なにも直接混ぜることに執着する必要はないわけだ。試作してみる価値はある。

「どうせなら天地を逆にした方がいい。その方が熱が移りにくいはずだ」

新しい魚肉ソテーを用意しようとフライパンを火にかけるエリスに、僕は熱流束の観点から提案した。暖められた空気分子は重力の影響が相対的に小さくなり、統計的に上昇する傾向となる。簡単な理屈だった。

「いや、ちょっとまってくれ」

「おかえりなさい、レオリオさん。どうでした」
「だめだった。世界が俺に追い付く日はまだまだ遠いわ。いや、それよりよ。なんか生の魚肉を使う料理っばいぜ」

レオリオ曰く、帰りにハンゾーとすれ違ったが、その後で目をやった彼のスペースには、火を使った形跡が微塵もないと言う。また、試験官のメンチもレオリオスペシャルの形にこそ論外の評価を下したものの、素材が生のままだった事には触れなかったそうだ。生のままというかレオリオのあれは元気にピチピチ跳ねていたが。

確かにハンゾーはフライパン等を用意していなかった。単に周囲を見て笑うのに忙しいのかと思ったが……。しかし、魚を生で食べるとは。キルアなど露骨に顔をしかめている。一方でゴンは割と平気そうだ。

「こんな感じか？」

とりあえず、クラピカが手近な食材で簡単に作った。手の中で軽く握った一口サイズの飯にスライスした魚肉を生のまま載せて、形を全体的に整えてあった。見た目はそれほど奇怪ではない。伝統料理として『あってもいい』とは思う。試験の課題にはいささか簡単すぎるような気もするが。

と、そのとき。

「メシを一口サイズの長方形に握ってその上にワサビと魚の切り身をのせるだけのお手軽料理だろーが！ こんなもん誰が作ったって大差ねーべ！」

クラピカが自分の手元を見る。近い。凄く近い。そして全く意味

がない。

全てが無駄になった瞬間だった。

結局、紆余曲折の末にマフタツ山の山頂から紐なしバンジーを敢行する事になるのだが、ヒソカとの戦いで痛んだ僕の体には、少しだけ負担が大きかったとだけ記しておく。

第四話「外道！恩を仇で返す卑劣な仕打ち！ヒソカ来襲！」

初弾命中。体内炸裂、……発動。撃破確認。体内データ異常無し。環境データ微修正。次弾装填。投射。

掃射される飛礫の嵐。絶叫を上げる人面鳥。念で強化および操作された石塊を喰らって無事で済むはずもなく、重力に負けて大地に次々と吸い込まれていった。蜘蛛の糸を切られた亡者達のようなと、なんとなく、その光景をみて考えた。

襲われかけた受験者が蒼い顔で戻ってくる。幸い目立った外傷はなく、人面鳥も既に遠巻きに眺めるだけだったが、念のため、トリツクタワーの外壁をもう少し砕いて予備弾を確保しておく。一流のロッククライマーを自称するだけあって、こんな状況でも速く、しかし焦らず的確に壁を掴むのは流石だった。

すぐに頂上まで辿り着いた彼に、ありがとう、ありがとう、とこちらが困惑するほど頭を下げられた。実のところ、僕に感謝されるいわれはない。横から手を出したのは、エリスに必要な人死にを見せたくなかったから。それだけだ。

しかし、これで実際に確認できた。僕のコンディションは悪くない。昨晚、飛行船でじつくり休めたのが大きかった。完全回復まで、もうしばらくといった所だろうか。

「どうする？ 降りようか？」

今し方一人の受験者が食われかけた外壁を見下ろして、僕はエリスに聞いてみた。その背から生み出される翼は本来空を飛ぶための

ものではないが、しかし飛行するという機能を立派に果たす程度の融通は効いた。この程度の高所から滑空して軟着陸するぐらい、彼女にとつては容易いだろう。もつとも、能力の発動自体がリスクーなのだが。

僕の方も全く問題ない。指の筋力を強化するなり指先のオーラを鍵爪に変化させるなり、外壁を伝う方法はいくらでもあった。なんならエリスを背負ってもいい。怪鳥も、念能力者の前では小鳥に等しい。加えて72時間という余裕ある時間設定。少々オーラを消費した所で、回復に困る道理がない。ヒソカ戦でのダメージを考えても余裕があった。しかし……。

「別の道を探しましょう？ 飛ぶと目立つちゃうし、なりより、あまりズルはしたくないわ」

友人知人と対等でありたいのだろう。稚拙だが、とても純粋な願いだっただ。エリスの意見を採用する理由はその一言で十分だったけど、あえて付け足せば、外壁攻略は試験の裏事情という面からみても難があった。

なぜなら、この試験は明らかに外壁以外のルートで攻略することが試験官の思惑と推測できるからだ。この程度の高さの壁面を伝って降りるのに、七十二時間という設定は明らかに過剰だった。であれば、正規の道であるはずの塔内部を進ませたい試験官からすれば、外壁ルートはかなりリスクの高い設定にしているはずだ。それが怪鳥以外の直接的障害などであればまだいいが、最悪なのが試験の評価そのものに関わるリスクだった。この試験自体は下に降りればクリアだそうだが、今後仮に、同着者の振り落としやシード権の選考、ハンターライセンス取得後の初期評価などに関わってくるなら話は異なる。

そしてもう一つ。

ちらりと後ろを伺ってみる。そこには例の奇術師がいた。外壁攻略が僕程度の念能力者で容易いのなら、ヒソカにはもつと容易いだろう。粘着性のオーラも大いに役立つ。再戦を求めて追ってこられたら、明らかに僕に不利だった。

さて。塔内部から攻略するなら、侵入口を開けるか隠し通路を見つける必要がある。足下へ向けて円を展開しながら歩いてると、ゴン達のグループに声をかけられた。

「隠し扉があと一人分？」

「うん、あるみたいなんだ」

足下に深く円を伸ばした所、それら五つの穴は十メートルほど下にある単一の部屋につながっていた。彼等の話も総合すると、五人用のルートだった所だろうか。エリスと目を合わせる。ゴン達なら人格的にも能力的にも、妹を任せるのに不満はなかった。

「エリス。僕はいい機会だと思うけど、どうする？」

しかしエリスは首を振った。

「残念だけど、遠慮するわ。心配なもの。アルベルトを一人にするときつとまた無茶するから」

ヒソカのいる方向に視線をやってからいう。

「ごめんなさい。そういうことだから、二人で進める道を探すわ」

結局、一次試験の時にエリスと一緒にいたポンスという帽子の少女、そしてポツクルという小柄な男と共に五人向けの部屋に向けて飛び込む事になった。どうやら我が妹君は、僕がヒソカとどつきあっている間に随分と幅広く交流していたようで、兄としては喜ばしい限りである。

残る一人として降ってきたのは、受験番号三〇三、体中を待ち針状のピアスで埋めた男だった。彼もまた念能力を使えるようだが、これまではお互いに暗黙の了解で不干渉の立場を貫いていた。途中からはヒソカの対処に忙しくてそれどころではなかったのが本音だが。

しかし、同じルートを歩むとなればそうは行かない。最低でも意思を明示的に確認しておく必要がある。

「やあ、どうも。アルベルト・レジーナです。よろしく」
『基本的に不干渉でいいですか？』

一步踏み出し手を上げて挨拶、と見せ掛けて【無色透明な黒色塗料^{ツグ}】を掌に具現化する。頷く彼。周りからは僕の挨拶に返しただけに見えただろう。とりあえず今はこれでいい。

しかし彼については、その言動の全てを記録しておく事にした。必ずしも用心のためだけではない。むしろ、僕自身の向上のためだった。ヒソカと戦ったあと、キルアやハンゾーといった裏の世界の出身者達を見て考えた事がある。今まで僕はハンターとしての体の使い方がかりをインプットしてきたが、もしかしてそれは、あまりにも視野が狭すぎたのではなかるうか、と。今後のためにも、是非とも彼等のデータを入手しておきたかった。

そしてそんな裏出身の受験者達で頂点に立つのが、恐らく303番なのだろう。当初は念能力者としてしかマークしてなかった彼だが、動きを分析して驚いた。体裁きは擬態も含めて極めて高度なものだった。できれば直接戦ってみたい。そんな想いさえ抱いた自分に対して、ヒソカに毒されているなど苦笑した。

裏切りの道。僕達に課された試験はそれだった。なんともおどろおどろしい名前だった。どうやらこの試験の発案者はかなり陰湿なようだった。まあ、いざとなれば裏切らせてあげればいいのである。僕達の試験内容は地上に辿り着く事なのだから。

「ま、始める前から気にしても仕方ないや。とっとと進もうぜ」

ポツクルの気楽な提案に同意して僕達は通路を進み出した。とりわけ変わった様子はない。僕と303番は円を展開してあちこち舐める様に走査しているが、壁の内部にも少々の罠があるだけで、これといって特異な仕掛けも存在しなかった。隠し扉や分岐すらないなお、罠については先頭を進むポツクルが大いに張り切っ解除していったので、僕達が指摘する回数は最小限で済んだ。ありがたい事である。

「おや？ 広い部屋だぜ」

一辺五十メートルほどの部屋の正面には頑丈そうな扉があり、その隣に何らかの装置と端的な言葉があった。

『扉の鍵はプレート一枚』

なるほど。裏切りの道か。

「そういう事ね。悪趣味だわ」

「プレートを失ったら失格ってルールはあった？」

「無いけど、去年は第三次試験でプレートの奪い合いをしたわね。今年も似たような試験が控えてないとは言いきれないわ」

ポンズが少し不安そうにいう。ポツクルは辺りを見渡している。広い部屋。開かない扉。少々あからさますぎる気がするが、まあ、戦えという事なんだらう。ハンター試験に挑む受験者達がこんなところで足踏みするはずがない。そしてその想いを嘲笑う様に、戦った事を後悔させる仕掛けがこの後に待ってる。

「おい、いいか。オレは……」

「ちょっと待った。議論はこの部屋をクリアしてからにしよう。その方が集中できていいだらう？」

「え？　できるの？」

ここで取り乱されても無益だ。安心させるため、ポンズの疑問には頷いておく。三〇三番は無言だ。その役は僕が引き受けるという事だろう。まあ、異論はない。僕は正面の扉を無視して部屋の中央辺りの床を調べ、予想された仕掛けを発見した。

「つまり、扉を開けても進むべき道があるとは限らないという事さ」

跳ね上がる床板。現れる隠し階段。カクンと落ちる三人の肩。

「大喧嘩の末、誰かのプレートを犠牲にして扉を開ける。でもそこには通路がない。大慌てで辺りを探したらノーコストで開けられる

隠し階段。険悪になるよね？」

「ほんつと！ 悪趣味っ！」

エリスの叫びが、彼らの心を代表していた。

しかし、これは前座だろう。こういう甘い条件の部屋を見せられると、次からも同じ傾向を期待する。だからこそ必ずあるはずだ。本当に、誰かを犠牲にしなければならぬ難関というものが。

もつとも、試験官の思惑通りにいけばの話だが。

「階段を降りた途端に分岐ばかりで罠がないのね」

「全くないのも無気味ね。なんでかしら？」

「簡単さ。分岐があつた方が意見が分かれていいだろう？ 罠は、今までの一本道に沢山あつたのは共同作業をさせてメンバーの絆を深めさせるためだろうね。裏切りのシヨックがより効果的になるように。今後は、忘れた頃に僕達に負担をかけるための罠が現れるはずだ。だから、二人ともポツクルを頼りにしてやってくれ。彼の調子次第でこの迷宮の難易度が変わってくる」

「わかった。まかせて」

「ええ、それがアルベルトの頼みなら」

必要ない所で面倒な事にならない様に、あらかじめ女性陣をポツクルにけしかけておいた。分岐点では目立たない箇所に【無色透明ム・ブラックな黒色塗料】で目印を付けておく。このような使い方は苦手な能力だけ、風雨の影響のない室内で他人のオーラに干渉されなければ数時間位はなんとか持つだろう。

それにしても三〇三番。彼は念・体術共にとても凄い。総合的にはヒソカと同じレベルじゃないだろうか。増々その技術が欲しくな

る。いつそこちから積極的に話し掛けてみるべきだろうか。

「悪いけど、ちょっといいかな？」

「……キルア」

「え？」

「キルアとは、友達なの？」

思ったより若い声だった。声紋解析は二十歳から二十五歳程度の男性と分析している。

「どうだろうね。少し話はしたから知人ではあるだろうけど」
「……そう」

キルアの関係者なのだろうか。その態度はあまりに素っ気なくて掴みにくい。

「で、なに？」

「ああ、良かったら体術を少し見せてほしいと思って。もちろんお礼はする。アマチュアだから予算にあまり無理は利かないけど、僕に払える対価で教えてもいい技術があれば是非頼みたい」

「見せるだけでいいの？」

「もちろん。修得するのは自分でやる」

「暇な時間で、有料ならいいよ」

「ありがとう。本当に助かる。あ、これ僕の連絡先」

想像していたより気さくな人のようだった。三〇三番、ギタラクルと名乗った彼と携帯番号を交換した僕は、思わぬ幸運に感謝した。

第五話「裏切られるもの」

極論すれば、試験官は蹴落とすために存在するのであり、受験者は蹴落とされるために存在するのである。トーナメント戦で敗者が脱落するのが当然なように、裏切りの道と名付けられたこの試験も、割り切ってしまうえばそれとなんら変わらない。トーナメントで負ける奴が悪いように、ここでは裏切られる奴が悪いのだ。

しかし、裏切るには相手が必要である。

僕は仲間と協力しなければならぬ。裏切るべき時に裏切れるように、できる限り仲良く攻略しなければならぬのだ。

現状、リスクなく裏切れるのは二人だけ。これから控える関門が裏切られた人物の試験続行に支障がないものばかりである筈がない。仮に二人とも不可逆的状态に追いやってしまったら、三人目から先はギタラクルとの戦闘を覚悟しなければならぬだろう。二人しかない貴重な裏切られ要員をいつ使うか。どれだけ二人を裏切り尽くせるか。いかにして二人で済ませるか。それが僕に課せられた命題である。

というのが、試験官が考えたこのルートの正攻法だと推測される。

まあ要するに、僕は正攻法で攻略する気はさらさらないのである。強いていえば最後の手段。保険扱い。精々そんなところだろうか。しかし、それは正義感に起因する選択ではなかった。

そもそも、僕は裏切りの道に反感を抱いてない。ハンター試験の課題としては、これはとても適切な内容だと思う。試験官にしてみ

れば実戦に近い環境で総合的な能力を評価できる。心身のタフさ、冷静な判断力、状況把握力、対人技能に戦闘能力。その上、受験者にとつては精神的な予防注射にもなる。現実のハントで裏切り裏切られる前に、試験という危険が比較的少なめの環境下で予行練習できるのだ。試験官個人の嗜好を除外すれば、実に考え抜かれない試験だった。だが、それだけに。

もし仮に、この試験をクリアできる人数の上限が一人に設定されていたら？

裏切りの道で、裏切られる側が常に一人とは限るまい。どうでもいい人物ではなく、絶対に裏切りたくない人を裏切らせる事こそ、この試験の真の趣向だろう。その意味では、僕達がこの道を選択したとき、試験官は小躍りしたはずだ。

たとえ試験とはいえ、エリスに僕を裏切らせたくなかった。だから早いうちに対処する。僕が正攻法をとらない理由はそれに尽きた。彼女のためなら喜んで脱落しよう。しかし、きっとエリスは、裏切りを良しとしないだろうから。

裏切りを演出したければいい。裏切りたい受験者は裏切れればいい。僕はエリスに別の選択肢を用意しよう。彼女が裏切らなくて済むように。

二番目のポイントは楽に通過できた。誰か一人の衣服全部を捧げると主張する扉の鍵は、しかしその要求を満たす前に、ポンズが発見したカードキーにより無力化された。発見の難易度は一つ前よりはるかに低い。確実にわざとなのだろう。都合のいい裏技のないポ

イントでも、希望に執着して仲間割れするように。

「また分岐……？ 一体いつになったら次に着くのかしら」

ポンズが心底うんざりしてこぼした。先頭を進むポツクルにも焦りが見える。しかし、現状、彼の進路選択は致命的な間違いを犯してない。オートマッピングの報告する所によると、僕達は確実に未知のエリアを開拓している。ポツクルの勘は的確だった。優れた嗅覚とでもいうのだろうか。ハンターとしてよほど優れた素質を持っているのだろう。

しかし、同じような分岐をしつこく見せられ続けると、どうしても不安になるのが人間である。どうやら第二ポイントと第三ポイントを繋ぐ通路はそれまでより遙かに長いようだった。これも揺さぶりの一つだろうが、実現するためには塔の全体的な構造を考慮して計画しなければならぬ大掛かりな仕掛けだ。ここまで演出に凝る試験官であれば、僕の撒く餌にも食い付いてくれるかもしれない。

「よし……、今度は右だ」

「右ね。わかったわ。……大丈夫よ。まだ前の部屋を出てから五時間しか経ってないもの。のんびりいきましよう。ね？ ポンズも」

「ああ、すまない。大丈夫だ。焦って失敗なんてつまらない事はないさ」

「そうね、ごめんなさい。私もちよつと軽卒だった」

この場所にも【無色透明な黒色塗料】ファントム・ブラックで目印を付けてから、ポジタイプに先を進む三人の後ろをついて行く。とりあえず手っ取り早い方法として要所ごとにマーキングを施しているが、これだけではいささか心もとない。他にも何か考えるべきか。

その様子を静かに見つめるギタラクル。彼にはそろそろ、悪巧みの相談をした方がいいのだろうか。

彼と小声で相談しているうちに分岐。すぐその後に分岐、上下左右、階段と分かれ道の組み合わせ。そんな通路を進んでく途中、とある分岐に差し掛かった所で、ポツクルがふと立ち止まった。

「風が鳴いてる。何かあるぞ」

結論からいえば、その予感は真実となった。

部屋の壁面には金属製の無骨なレバー。隣には感電注意と大書きされた虎柄の看板。そんな、誰もが躊躇する身体機能の根本に関わる凶悪な仕掛けは、ギタラクルによって一瞬で解除された。啞然とする僕達に目をくれず、開いた扉の先を見つめたギタラクルは、しかし微かに顔をしかめた。

扉の向こう、少し進んだ通路の先に、今よりも大きな広間があった。

二重関門。なんともまあ、心に揺さぶりをかけたがる事だ。

その広間には床がなかった。深い深い奈落への入り口。そんな大穴に四方を囲まれた中央に、闘技場と思しき円盤がある。直径が八十メートルはあるだろうか。巨大な空間に浮かぶリング。そこには、多くの男達が控えていた。

「ようこそ！ 百対一デスマッチへ！」

中央にいた大男が叫んだ。彼がリーダー格なのだろう。粗末な上下を着た集団の中でも、人を率い慣れた輝きがあった。

「これより諸君の中から代表者を選び、我々全員と戦ってもらおう！
選抜は抽選！ 武器の使用は禁止であるっ！」

咆哮する大勢の男達。それは間違いなく歓喜だった。野獣のような、と形容してもいいような。

「勝利条件は我々全員の打倒か降参！ 死ぬかギブアップすると敗北となる！ 死亡した場合は次の代表者の選出に入る！ ただし！ ギブアップした場合は当人のみこの場所の無条件通過権が与えられる！ その際、残りの諸君は試験終了までこの場で拘束される！
何か質問は！？」

僕は手をあげて尋ねた。

「抽選で選抜された者が試合前に行動不能になっていた場合は？」
「その場合っ！ ハンター試験の棄権を宣言済みか死亡していれば再度抽選をやり直す！ そうでなければ気絶していても試合に参加してもらおうっ！」

よくぞ聞いてくれたとばかりに男が答える。なるほど、彼等の考えは大体分かった。僕がギタラクルであれば屈強な男を同時に百人相手にするのも至極容易い。だが、僕達は最後まで選ばれない。最初に抽選で選ばれるのは。十中八九エリスかポンス。そしてもし戦闘になった場合、デスマッチと称しながら死なせるつもりは微塵もない。ギブアップするまでは時間一杯、適当に玩具にするつもりだ。もしかしたら、ギブアップすら許さない算段かもしれないが。

つまり、戦闘に長けた僕とギタラクルに仲間を裏切らせるのがこの関門の主眼だろう。

「では抽選に入る！」

男が麻袋の中から取り出したのは、やはりと言っかなんと言っか、エリスのナンバーを示す札だった。皆に僕の推測を説明する。怒りに弓を握りしめるポツクル。帽子を爪弾いて蜂を呼び出すポンズ。二人ともエリスの裏切りを懸念しないどころか、妹のために怒ってくれる気持ちはとても嬉しい。ギタラクルは相変わらずな様子だった。そして、当のエリスといえば、無表情で男達を見つめている。

「なんなのよ、あいつら！ エリス！ 気にする事はないわ！ 待つてなさい。今すぐ全員始末してあげるからっ！」

念能力も使わずそこまで蜂を操るポンズの技量は見事だ。しかし……。

「アルベルト」

「ああ」

「纏を解くわ」

「……あまり無茶するな。お前の情報も、気軽に晒していいものじゃない」

「ごめん、お願い。許せなくて。命がけの厳しい試験内容を課すのはいいけど、こんな嘲笑うみたいなのは違うと思う。だって、今年だけで沢山の人が亡くなってるんだよ！？」

エリスの怒りは正当だが未熟だ。理不尽に対処する能力を測る試験。嘲笑に耐える冷静さを評価する試験。それらは成立して当然だ

るう。ハンターとして社会の荒波に晒されれば、そんなもの、日常的に待ち受けている。

それでも。

「わかった。エリスが望めば否やはないさ」

最愛の妹の髪の毛に、ぼんと手を置いて僕は言った。呆然とするポツクルとポンスを後目に、エリスは現れた通路を渡って行く。

「お前っ！ 見損なっただぞこの野郎！」

「そ、そうよっ！ あんたあの子のお兄さんなんですよ！ 止めなさいよ！」

二人の危惧はもつともだ。エリスの体術は戦力にならない。たとえ念が使える事を鑑みても、彼女の勝ちには難しかった。エリスの発は大技専用で、この状況下にはそぐわない。対多数戦闘の経験も技能もない。このような場合、群れに突っ込み掻き回し主導権を握るのが常道だが、エリスの状況把握力では不可能だった。普通にやれば押しつぶされる。それが絶対の真実だった。だが。

「ありがとう。その気持ちは本当に嬉しい。でも大丈夫、あいつは勝つさ。必ずね。それより、僕達の後ろに隠れて、少しの間じっとしていてほしい。あと……、できればいい。エリスをあまり怖がらないでやってくれないか」

言って、僕は沈黙を貫くもう一人の人物に視線を向けた。

「ギタラクル」

無言で続きを促される。

「携帯が圏外だ。振り込みは後でするから頼まれてくれ。僕達の堅
で二人を守る。五百万でいいかな？」

「ケン？」

疑問の声を上げるポツクルを後ろに下がらせる。ギタークルが頷
くのを確認して、僕達は並んで体勢を整える。そのとき、彼から小
声で尋ねられた。

「練？」

「素だよ。エリスは練を修得してない」

その意味は、きつともうすぐ分かってしまう。

「お待たせしました」

「ギブアップはするかい、お嬢ちゃん？」

「いいえ。合図はまだです？ それとも、もうはじめていいのかし
ら？」

闘技場についたエリスは、無表情のまま相對した。舌舐めずりを
する男達。勝利を確信した顔だった。背中から齒ぎしりが聞こえて
くる。狼の群に襲われる哀れな羊。眼前の光景は、それ以外の何か
ではなかった。男の一人が、ニヤニヤしながらコインをトスする。
それが開始の合図だった。

コインが地面に落ちる。百人の男が殺到する。佇んだままのエリ
スが、寂しそうな微笑みを浮かべた。

纏。

自然状態で垂れ流しになっているオーラを肉体に留める技術。エリスのそれは、その実、絶との複合技に近かった。それが解かれた。それだけで、ただ、それだけだった。

見よ、蒼ざめた馬がやってくる。

吹き荒れる生命エネルギー。垂れ流すだけで圧力をもつオーラ。地上に咲いた新しい恒星。今の彼女に比べたら、暴風雨の方が遙かに優しいだろう。次々と倒れ、吹き飛ばされ、あるいは嘔吐する男達。人の纏つていい威圧ではない。人の世にあつていい理ではない。単純に存在の尺度が違う。たったそれだけの事実である。

こんな、どこにでもいる小娘が。

加速する重圧。あまりにも暴虐。ドレスの裾が翻り、母親の首飾りがそよいで踊る。何の事はない。自然に垂れ流されるオーラだけで、物理干渉するほどの圧があるだけである。念を使えない一般人が、この中で生きていけるはずがなかった。

百人が全員倒れ伏したのを確認して、エリスは一つ深呼吸した。途端、暴れ狂っていた生命力が彼女を中心に収束する。自らのオーラを制御できる強固な纏。彼女が師匠から教わり鍛え上げた念の技術は、ほぼ全てがこれを実現するためだった。

男達は辛うじて生きてる。肉体的には無傷だろう。精神も、しばらくすれば回復するはずだった。しかし、これだけは言える。エリスが纏をするのがもう少し遅かったら、彼等は確実に死んでいた。

人は、微笑みで殺せるのだ。

戦いとも呼べぬ戦いが膜を閉じた後、エリスが闘技場に渡った通路が再び現れ、僕達はこの広間を突破する事が出来た。おそらくは試験官が見ていたのだろう。途中、確認した男達は思い思いに倒れ気絶し悪夢にうなされていたが、死傷者は一人もいなかった。

しかし、エリスが無傷で本当に良かった。

あれは、実のところあまり戦闘向きではない。ある程度の纏か堅があれば防げるし、同じように貫けもする。正味の攻撃力も大した事ない。エリスは流どころか凝もできないのだから。それでも、彼等の心を折るには十分だった。いざ、万が一の事があれば念弾で援護するぐらいは迷わずしたのだが、懸念ですんだのが嬉しかった。

「なんだっ たんだよ、あれは……」

「そうだね。ハンター試験に受かれば分かるさ。今教えられるのは、それだけかな」

宥めるようにポツクルにいう。彼は、そしてポンズも真つ青だった。僕達の背中に隠れていたとはいえ、あれは相当シヨッキングな事件だったらしい。それでも、エリスを避けないのがあるがたかった。むしろ彼等の方からエリスに話し掛けてくれている。妹は本当にいい友人を持った。

「……あれ？」

「どうしたの？」

「いや、ちよつとな。この場所、さっきも通った気がしたんだが……、いや、まてよ？」

分岐点に来た時だった。ポツクルが突然立ち止まった。何か違和感があるのだろう。腕を組んでじっと考え込んでる。裏切りの道という状況で仲間に素直に相談できる人格。違和感を的確に拾い上げられる直感力。それを気のせいと断じない判断力。それらを駆使し積極的にパーテイーマンバーを統率するその姿勢。全て正しい。未熟なアマチュアの戯れ言だが、彼はきつといいハンターになる。そう思った。

そしてポツクルの疑問は的確だった。オートマツピングも内耳の耳石と三半器官を利用した簡易慣性位置システムも、ここを一度通った分岐点だと報告している。ならなぜ彼が違和感を感じているのか。それは、明らかに辿り着いてはいけな順路でこの位置に帰ってきたからだった。

おそらく、迷路全体を動かす大掛かりな仕掛けが存在する。

「ちょっといいかな？ 実はさつきから一度通った場所には目印を残していてね。この辺りに……、あれ？ ないぞ？」

「通った事ない場所ってことか？」

「ああ……、多分そうだと思う」

【ファントム・ブラック無色透明な黒色塗料】の痕跡が残されてない事を確認し、ポツクルと一緒に首を傾げる。確かに具現化系の能力とはいえ、こうもすぐに完全消滅する程やわではないはずだ。そう、誰かのオーラに掻き消されでもない限り。

今の僕の様子を、試験官は監視カメラで見てるのだろうか。

「仕方がない。先へ進もう。どうやらオレの勘違いだったみたいだ」

決断したポツクルに同意しつつ、隙を見て【無色透明な黒色塗料】ファントム・ブラックで再びマーキングする。今度はかなり強めに念を込めた。簡単に落ちる事のないように。

横目で確認したギタラクルは、カタカタカタと佇んでいた。

微かに、カタリと異音が聞こえた。確認するまでもない。隣のギタラクルが爆発した。遅れずに僕も追従する。床を蹴り壁を蹴り天井を蹴る。堅は既に展開してる。疾走。否、もはや既に飛行に近い踏み締めた壁面が陥没する。景色が滝のように流れて行く。いつそ音すら置き去りにしてしまおうと、僕達二人は全速力で今来た迷路を逆走した。

先ほどの分岐点まで戻ったとき、そこに屈んでいたのは顔面に傷のある男だった。最高速のまま飛来する僕達。驚いて腰から二本の曲刀を抜く男。反応があまりに悪すぎる。そこは離脱するべきだろう。いや、そんな暇すら与えないが。

曲刀を投げようとするモーションを視認して、ギタラクルの飛び蹴りが炸裂した。面白いように迷宮を弾む二刀流の男。僕はそれに追いついて、空中で拘束して床に叩き付けた。

「やあどうも。お勤めご苦労さまです」

着地し、朗らかな表情を選択する。余裕を演じ、立場の違いを分からせるための常套手段だった。男は唸りながらも堅すらしない。あまりに拙い。恐らく、プロハンターではないだろう。協会に雇わ

れたアマチュアといったところだろうか。

「もうお察しでしょうが、僕が残した念は畏でした。失礼ですが、あれだけ陰湿な試験内容を考えた方々です。意に沿わぬ状況が続き苛立てば、それぐらいはすると思っていました。でも、まさかこんなに早く餌に食い付くとは思わなかったな」

ファントム・ブラック

【無色透明な黒色塗料】を劣化させるのは、一般人が垂れ流す生命力でも可能だ。それぐらい弱い能力だけど、しかしさすがに、短時間で消すなら最低でも纏ができる程度の能力者がいる。つまり、試験官はそこそこの手駒を使ってこの場所の目印を消したわけだ。

「確認しておきますが、あなたが試験官ではないですよ。試験官自らがこそこそ暗躍するのはこの試験の趣旨に反するでしょうし、なにより、責任者が管制できる場所を離れるとは思えない。現在進行中の試験は、僕達のルートだけではないのですから」

試験官に手をあげて不合格になった、という話をヒソカから聞いた。一次試験が始まる前の事だ。さすがにそれは少しまずかった。しかし、試験官が試験のために運用し、かつ直接的な妨害を担当させる人員なら、受験者が排除すべき障害の一つだろう。僕達はそれを正当な手段で実現しただけだった。

「ぐっ……！ 畜生っ！ 鬨るかッ！ 早く殺せっ！」

伏したまま、悔しそうに唸る男。抵抗は無駄だと分かっているのだろう。しかし……、僕は一つ溜め息をついた。

「勘違いしてるようだけど、僕の目的は貴方の命じゃない。クリア条件はあくまでも、スタートから七十二時間以内に地上に辿り着く

事なんだ。むしろ殺人みたいなマイナス査定を喰らいそうな行為は最小限にしたいぐらいだからね。まあ、命なんてどうでもいいのなら、後ろの怖いお兄さんに身柄を任せるだけだけだ」

当たり前といえば当たり前だが、こんな気合いが入った迷路といえども、いや、だからこそメンテナンスハッチは存在するのである。いちいち屋上のあの入り口から入るのでは、人手がいくらあっても足りないからだ。

「悪いけど、諦めて裏切ってもらいたい。貴方の雇い主の思惑を」

男の顔のすぐ隣に、ギターラクルが針を飛ばした。それがとどめとなった。

「オイ！ 大丈夫か！ 一体何がどうなってるんだよ！」

ドタドタと三人が駆け戻って来たときには、男は情報をすっかり吐き出していた。信じられないが、それでもプロハンターらしかった。去年の試験でヒソカに一蹴されたという試験官、それがこの彼らしい。今年この塔にいたのは去年の復讐が目的だったそうなのが、可哀想だがこの実力では挑戦しても言わずもなだらう。

「ああ、親切な人がいてね。この人が裏切りの道から途中下車する方法を、隅々まで詳しく解説してくれたんだ」

言つて、念のことをぼかして説明した。ポツクルとポンスは終始胡散臭そうにしていただが、どうやら出れるらしいことは分かってくれたようだった。

「それで、どうする？　優等生に徹するならこのまま裏切りの道を進むという手もあるけど、とりあえずギタラクルは抜けるらしい」

このまま進むかと聞かれて、三人とも嫌そうな顔をした。どうやら結論は一緒らしい。クリアの方法としては変則的かもしれないが、この道をこのまま進みたがるよりは精神的に健全だと思う。

その後、僕達はエレベーターで地上に直行した。

道筋全体を変形させ順路を変える機構自体が、管理エリアへのアクセスも兼ねていた。なるほど。これならよほど大きな円を張らない限り見つからないはずだ。

第三次試験突破記録は十五時間三十四分。地階には、ハンゾーを始め既に数人の受験者がいた。

第六話「ヒソカ再び」

第四次試験会場へ向かう船上で、管制空間に入って調節を施した。長丁場に設定されていた第三次試験のおかげで、僕はじっくり休息を取る事が出来た。休んで回復した体を総点検し、設定を調節する機会が欲しかったのだ。また、塔内部で記録したギタラクルのデータも、分析して導入可能にしたかった。それらを一通り完了させた所で、僕はもう一つの確認に取りかかる事にした。

頭の隅で三十時間以上かけてコツコツ計算した結果を具現化系総合制御に受け渡し、仮想展開モードで出力させる。管制空間内の人格フィギュアの眼前に出現したのは、どこにでもあるようなレースのショーツだった。色はドレスに合わせて黒を選択している。無論、エリスのための品である。

たとえば【コツペリアの電脳】マリオネットプログラムといえど、具現化系は扱いにくい。

オーラの消費率が比較的悪いというのもあるが、主な理由は別だった。運用に要求される演算量が他の系統と比較にならないほど多いのである。故に、単体で能力として確立されている【無色透明な黒色塗料】ブラック以外の具現化系は、極一部の例外を除いて使用頻度が格段に低かった。戦闘時の応用は更に難しい。つまり、今は珍しい機会という事になる。

この程度の体積の小物であれば、ナノ単位の微細構造が重要でない限り、処理機能の占有率にもよるが十数時間から数十時間程度で有限要素法により近似値を数値計算可能だった。僕の手から離れれば劣化するので強度は市販品より劣ってしまうが、データさえあれば再生成も容易い。容量を食う情報なので試験が終わったら破棄するつもりだが、それまではエリスの下着類ならオーラが尽きるまで

具現化する事が可能だった。なお、僕の下着は丈夫な綿製である。適当に水洗いすれば十分だった。

一仕事を終えて管制空間から離脱した所で、僕はこちらにやってくる人影に気が付いた。レオリオだった。緊迫した空気が漂うこの船内には似つかわしくなく、よっ、と気さくに挨拶された。後ろにはゴンにキルア、クラピカも肩を並べて追従してる。

「やあ。エリスなら船内を廻らせてるけど？」

「さつき会ったぜ。いや、それよりアルベルト、お前に話があるんだが」

「僕に？」

次々と頷く四人。

「まずは一発殴らせる」

彼ら全員に殴られた。1/6「軽度警戒」にしてあつた自動防衛管制が迎撃を提案したが、僕はそれを却下した。肉体のダメージは皆無だが、なぜ危害を加えられたのか。彼らに説明を要求した。

「ヒソカから聞いたよ。奴を呼び寄せたのは貴方らしいな」

「こちとらひどい目にあつたんだぜ？ どうしてくれるんだ、ああん？」

「そつだよ。次やったらエリスに言いつけるからね！」

ため息をつきつつクラピカ。そしてレオリオは柄が悪い。ゴンの脅迫方法は的確すぎる。

「ああ、その件か。それはすまない。反省はしないが謝罪はするよ。」

だからエリスに告げ口するのはやめてくれ。頼む」

「フーか下に部屋があったの知ってたのかよ」

「ただの推測さ。確信はなかったから黙っていた。君達を惑わせるつもりはなかったからね」

キルアの鋭い指摘を嘘でかわす。じつと観察されるが問題はない。表情や声色から嘘がばれる危険は、僕に限っては全くなかった。しかし勘の鋭い少年だ。時々いるが、この子も虚言を皮膚感覚で判別できる人種かもしれない。

「それに、戦力にはなっただろう」

「うん。すごく強かった。アルベルトもあれぐらい強いんでしょ？」

目を輝かせてゴンがいう。そうか。彼はこういう子か。無邪気に、真つすぐに、善悪の区別すらくなく強さに憧れ追い求めている。こういう子供が才能を持っていると、あつという間に成長する。……ただ、少し危うい。

「僕はあれより一段落ちるよ。現に一回負けている。だけど、何度も負けてやるつもりはないかな」

まあ、つもりだけで勝てたら苦勞はないけれど。

「そついえば、ヒソカをご指名の挑戦者はいなかったかな？ 顔に傷のある曲刀使いなんだけど」

「うん。見なかったけど何で？」

「いや、僕達が進んだルートでそついう人に会ってね。そうか、諦めたのか」

それは今年だけだろうか。振り切る事ができたのだろうか。他人

の価値観に口をはさむほど傲慢ではないつもりだけど、それはきつと幸せだ。叶わない復讐に身を滅ぼすより。これからの人生、生きてさえいればいいこともある。ハンターライセンスすら持っているんだ。やり直す方法はいくらでもある。

そこまで考えてふと思った。もしもエリスを失ったとき、僕は諦める事ができるのだろうか。

……やはり、僕は傲慢だったらしい。諦める事などできないだろう。エリスの記憶を消去したら、僕は僕でなくなってしまう。エリスが失われるぐらいなら、彼女の代わりに死にたかった。それが叶わぬというのなら、せめて一緒に散りたかった。願わくば、彼女の人生が幸せな終わりを迎えますようにと、僕は信じてもない神にそつと祈った。

「見つけた。こっちにいたぞ」

「ほんとだ。探したわよ」

ポツクルとポンスまでやってきた。随分大所帯になってきたなとそう思った。しかしエリスがいないのが違和感があった。今までは、僕ではなくエリスの周りに人が集まってきていたと思ったが。

「ポツクル、エリスは？」

「彼女なら向こうでトンパと何か話し込んでたぜ」

「げ、あのおっさんまだ残ってたのかよ」

「むしろお前が知らなかった事の方が驚きだ。他の受験者のチエツクは基本中の基本だよ、レオリオ」

クラピカの言葉はもつともだ。僕の場合、確認した全員の諸情報をデータベースにしてまとめているし、そこまでいなくても、全

員が同じような努力をしているだろうと思っていた。ヒソカのような例外を除いて。

「それよりアルベルト。あなたね、エリスに何を吹き込んでるの？」

「ん、ああ。四次試験の試験の性質を分析した結果を少し。あとは死者が確実に出るであろうことと、誰と永久の別れになってもいいように、残ってる友人知人の顔を見ておいでも勧めておいた」

「あなたね……」

ポンスが苦々しい顔をしている。レオリオやポツクルも少し嫌そうだった。対して、ゴンやクラピカは顔色を変えない。キルアなど、何を当然の事と呆れてすらいる。

「ちよつとは言い方つてものを考えなさいよ」

「いや、彼の言はもつともだ」

ポンスと僕の間クラピカが割って入る。皆の視線が彼に集まった。

「第四次試験は今年初の受験者同士が直接的に争うものだ。いくら言葉を飾っても、そのルールも危険性も変わらないだろう。ならば、我々も覚悟を決めた方がいい」

「うん、そうだね。その方がきつとすつきりやれるよ」

「だよなー。っていうかさ、危険があるのは当然だろ？ 一次試験から死んだ奴いるじゃん」

クラピカの意見に、皆が口々に同意する。

「誰が落ちても恨みっこ無しってやつだな」

「違うない。アンタいい事いうじゃん。オレ、ポツクル。よろしく

な」

「レオリオだ。こう見えても医者志望でな、怪我したらいつでも言ってくるよ」

受験者同士の対決を目前にして、何故か、新たな友情を育む人間もいるようだ。

「……そうね。腹をくくるわ。みてなさい。私だって立派な幻獣ハンターになるんだから」

そして、数瞬の後にポンズも目を閉じて正面で拳を握った。納得したのか、単にこの場の空気に吞まれたのか、それは僕には分からない。

「幻獣ハンター志望なのか？」

「うん、そうだけど。おかしい？」

意外といえば意外だった。僕の専門でこそないが、あれはかなり泥臭い仕事だ。幻獣という名称からイメージされるファンタジックさとは程遠い。生い茂る藪の中で幾夜も息を潜め、動物の糞を舐めて情報を集め、ボウフラの池に潜れる人間。そういう連中にしか勤まらない。根っからの動物好きであるのは前提以前だ。常識的には、若い女性に似合う職業とはいいがたかった。

しかし、僕はあの塔でポンズの技量をこの目で見ている。念能力を全く使わずに蜂を自在に操る様子は見事だった。自然と心通わせずにできる技ではない。そんな彼女だ。幻獣ハンターの仕事など、僕以上に熟知してるのだろう。ささやかだが、その夢を応援したくなかった。

「幻獣ハンターなら、師匠の知り合いに何人かいる。よかつたらしばらくアマチュアとしても弟子入りしてみたらどうか。紹介状なら用意できると思うよ」

「なんでっ！ 落ちる前提で話を進めてるのっ！」

ポンズの拳が飛んできた。霧囲気がほぐれ、明るい笑い声がその場に満ちる。僕は彼らに囲まれて、今日はよく殴られる日だと、そう思った。

「アルベルト？ あら、みんな集まってどうしたの？」

エリスが戻ってきたようだ。彼女は僕を囲む皆を見渡して、何を思ったのだろうか、満面の笑みで飛びついてきた。僕はそれを受け止める。エリスは胸板に顔を押し付けて離れない。まるで母親みてーだなと、レオリオが呟いたのが耳に入った。

僕の獲物はすぐに見つかった。受験番号七十六番。エリスがトンパに尋ねた所によると、チェリーという名の武闘家らしい。毎年のように試験終盤まで残るベテラン受験者だそうだ。なるほど。その実績、決して伊達ではない。

「いかにも。オレが七十六番、チェリーだ。……お前には、見つからなければいいと思っていたが、待ってもいた」

「待ってましたか」

「実はな」

言って、彼が取り出したのは、僕の番号を示すカードだった。なるほど。お互いに目標だったらしい。

「ひとつ、頼みがある」

「なんででしょうか」

「君は強い。今のオレでは勝ち目はないだろう。だが、君が勝つても、オレを殺さないでくれないか。……オレには、強い目的がある」

臥薪嘗胆。彼ほどの武闘家がどれほどの苦汁を飲み干してその言葉を吐いたのか、僕には生涯分かるまい。無言のままに頷いた。それで良かった。それ以外の全てが余計だった。プレートを手渡す。僕が負けたら彼に渡すように頼んでから。エリスは、真剣な表情で頷いた。そして、チェリーもエリスにプレートを渡した。それが当然だというように。

自動防衛管制を0/6「無警戒」に、戦闘用体術タスクをフルマニユアルモードに、体外噴出オーラをゼロに設定した。心身が流水の心地になる。

「……すごいな」

チェリーが感嘆の声を洩す。絶。この状態で全力を尽くす。念を知り、高みにいる者の驕りだろうが、これが僕にできる精一杯の誠意だった。ここで負けてもいいと思った。自分の納得できる道を選べ。それが師匠の口癖だった。もし仮に、ここで負けてエリスまで不合格になったなら、僕は永遠に悔やむだろう。それでも。

「いね」

「ああ」

お互いに構える。それっきり無言。エリスも何も言わなかった。森にたゆたう静寂の中、木の葉が風に鳴っていた。

先に動いたのは、僕だった。鳩尾に突き刺さる渾身の掌底。呻き声一つ漏す事なく、チェリーの意識は闇へ消えた。

「いいかい。こうやって偽装した人物を樹上に隠蔽するのは一般の人間及び地上性の動物に対して有効性が高い。また、森林状態さえ良好なら飛行性の脅威に対しても高い隠密性を誇る。しかし赤外線による観測では位置が露見しやすいし、その上、自然の生態系においても考慮しなければならぬ天敵がいる。なんだか分かるかな？

エリス」

「そうね……。樹上生活型の肉食獣とかかしら」

「その通り。猫科の猛獣の一部やヒヒなど大型の真猿類、そしてなにより肉食性の樹上型魔獣が挙げられるね。この島の環境ではこれらを無視して構わないけど、決して万能ではないのは憶えておいてほしい」

水場から近い位置の大樹に気絶したチェリーを隠蔽するついでに、エリスにちよつとした技術講義を施しておいた。役立つかどうかは分からないが、知ってて損はないだろう。ツタを編んで作ったロープでチェリーの体に安全帯を入念に施し、葉のついた枝をそこかしこに付与して偽装を施す。地中と違って水はけがよく、野犬やイノシシなど嗅覚に優れた動物にも強いのが利点だった。伐採した木を割り貫いて作った即席の容器に水や果実を入れたものを、側にくいっつか吊るしておく。ここまですれば、チェリーが目覚めて自力で動けるようになるまで回復する程度の時間は稼げるはずだ。

さて。これであとはエリスの目標を捕らえ、プレートを入手するだけだった。くじにより指定された番号は三八六番。体の動かし方

から獵師とみらる大柄な黒人。他の受験者達の会話から、推定名称ゲレタ。僕のデータベースにあった情報は、エリスがトンパから入手したものとほぼ完全に一致していた。

凄腕の獵師ゲレタ。第四次試験会場であるゼビル島は、彼にとつて最良のフィールドだろう。恐らく、大まかな居場所を特定するだけで難しいはずだ。僕が主体となれば補足する方法はいくつか考え付くが、できればエリスに狩らせたかった。しかしいいアイディアが思い付かない。

「……アルベルト、ごめんなさい。わたしちよつと疲れてるみたい」

そのとき、エリスが疲労を訴えた。無理もない。試験中はずっと緊張の連続だった。見れば、顔も少し赤かった。早めに休ませた方がいいと思った。ひとまずエリスを抱きかかえ、僕はゲレタの搜索に向かった。

それから数時間ほどゲレタを探したが、手がかりすらも見つからなかった。いや、もっと正確に言おう。僕はスタート地点に戻ってゲレタの痕跡を把握する事から始めたのだ。地を舐める様に足跡を追い、一步一步慎重に道筋を解析した。しかし結果は、微か数歩で途方に暮れた。

嫌というほど痛感した。こと、森林を舞台にしたハントの技術は、向こうが完全に上をいつてる。推測だが、彼は自然に溶け込むのが恐ろしく上手い。念能力者でもないのに完全な絶を嗜み、生活痕の消去も完璧に近い。この広い森が舞台では、少なくとも偶然近くに寄らない限り、実力で発見する事は無理だろう。人間の痕跡は飽き

るほど見つけたのだが、そこから算出される身長と体重のデータは明らかにゲレタとは別物だった。いかに僕が都市部でのハントを主体とするアマチュアハンターとはいえ、かなり悔しい気持ちだった。

そうこうしているうちに日が暮れた。こうなれば、今日はもうゲレタを見つけるのは無理だろう。エリスもこれ以上連れ廻したくない。

乾いた地面のある場所を探して、そこを今宵の寢床に決めた。動くのを禁じていたからだろう、エリスの体調は大分回復したようだった。僕はそれを確認した後、今後の方針を話し合った。ゲレタはエリスの目標なのだ。できる限り本人に考えさせるのが、筋であり彼女の望みでもあった。彼女はしばらく思索した後、一つの作戦を提案した。それは、ゲレタ搜索と平行して他の受験者のプレート三枚分の収集を試みるというものだった。確かに妥当な方針だろう。しかし、そのためには一つだけ確認する必要があった。

「もしエリスの友人を見つけたらどうする。例えばポンズを発見したとするよね。期限まではまだ日数があつて、見逃しても他の受験者が見つかるかもしれない。だけど見つからないかもしれない。そういう状況で、この人は狩る、この人は狩らないという基準をあらかじめ明確に決めておかない限り、その作戦には賛同できないな」

焚き火がエリスの顔を照らし、揺らしていた。この火はいわば罨だった。戦闘能力に限りさえすれば、ヒソカとギタラクル以外の受験者に勝てる自信があつたからだ。自動防衛管制は3/6「厳重警戒」を維持している。無論、徒党を組まれても誤差にしかない。

「……決まってるわ。狩りましょう。例外はヒソカとギタラクルだ

け。それ以外の全員が対象よ」

その覚悟があるのなら、反対する理由はなにもなかった。僕はエリスを腕の中に招き寄せ、少しでも長く眠るように言い含めた。

「ねえ、アルベルト」

「なんだい？」

「もし、この試験に受かったら……」

「ああ」

とろんと、半分眠った声でエリスがいった。

「……二人で、世界中を巡りましょう。世界中を巡って、素敵な景色を沢山見て、いろんな人とお話しするの。そして、お爺さんとお婆さんになったら、山奥の小さな家に住んで、暖炉の前で、思い出話に花を咲かせましょう」

それつきり寝息をたてはじめたエリスを、僕はできるだけ優しく抱き締めた。無性に寂しい気持ちだった。その願いが叶わないからではない。エリスは、そんな夢しか抱けないのだ。

幼い頃、彼女は無邪気な笑顔で語っていた。海が見える丘に小さな白い家を建てて、子供が二人と大きな犬。家族で幸せに暮らしましょう。何度もその設定でおままごとをした。師匠の家から離れる事ができなかつたあの頃。絵本で知った海に憧れた少女がいた。

定住。結界の要石が砕けたあの日、エリスにはそれができなくなった。少なくとも、人のいる場所では不可能だった。この広い世界で、エリスはどこまでいってもよそ者だった。

翌日からの探索は、あまりはかどったものにはならなかった。原因はエリスの存在だ。彼女は気配を殺すのが極めて苦手だ。息を潜めても殺せない存在感、ハントに長けたものには大いに分かりやすい目印になる。経験の乏しい者、勘の優れない者、運のない者は時間が経つほどに脱落していく。そして、エリスの近くには僕がいるという情報は、試験期間中に広まりすぎていたのだった。かといって、こんな試験でエリスを一人にできるはずもない。エリスは積極的な凶作戦も提案したが、ヒソカ存在を考えると頷けなかった。

それでも、僕達は二枚のプレートを入手する幸運に恵まれた。

一人はソミーという猿使いだった。エリスの姿を見て絶好の獲物を見付けたとばかりに近寄ってきたが、彼女がわずかに纏を緩めた瞬間、顔面蒼白になって狼狽した。エリスの素人拳法が顎にクリーンヒットするぐらいには隙だらけだった。相棒の猿も主人以上に怯えていたので、樹上で見守る僕の出番は全くなかった。

もう一人、アモリという受験者は常に三兄弟で行動していたと記録に残っているのだが、たまたま各自分散して自分の獲物を狩りに出掛ける所だったようだ。こちらはエリスのオーラに取り乱すも、戦意喪失することなく逆に向かってきた。窮鼠猫を噛むの諺通り、追い詰められて逆上したのだろう。しかし、念が使えない者に纏で守られたエリスを倒しきるのは難しい。恐慌状態になった彼には、逃げるという手段も思い付かなかったのだろうか。しばらく続いた戦いを制したのは、防御力とスタミナで大幅に勝るエリスだった。

そのように数日かけてあと一点まで迫った所で、僕達はそれに出くわした。森の中にそれはあった。無惨に打ち捨てられて転がって

いた。

首のない、ゲレタの遺体。

ここでゲレタは殺された。失われた頭部。体に突き刺さった何枚かのトランプ。誰の仕業か考えるまでもなかった。プレートはどこにも見えなかった。恐らくヒソカが持ち去ったのだろう。

必要なプレートがあと一点分になった時点でゲレタの重要性は大きく下がっていたが、それでも獲物をとられた無念はあった。しかしそれ以上に悲しかった。友を亡くした喪失感に近かった。会話どころか側に寄った事すらなかったけれど、それでも彼は僕とエリスにとって、紛う事なき強敵だった。敬意の持てる高貴な敵であったのだ。

エリスと二人で遺体を丁寧に埋葬して、僕達はその場を立ち去った。

あと一点。得点のペースは遅かったが、最悪の場合は僕の分を渡すつもりだった。これが終われば、あとは最終試験だけだった。

エリスの様子が急変したのは六日目の夜更けの事だった。全身に油汗をかき、真っ赤な顔で僕の差し出した手を握りしめる。体表のオーラが異常に濃い。この症状に心当たりはあった。嫌というほどありすぎた。そして、だからこそありえないと断じたかった。本来なら、纏のまま一ヶ月程度は余裕で持つはずだったから。

【マリオネットプログラムコッペリアの電腦】が推測される原因を報告してきた。実戦環

境に置かれる事による高揚感。仲間とともに積極的に試験に取り組む事による責任感。未知の状況を楽しむ好奇心。そんな、他の人間なら明らかに良好な状態へ導かれるはずの諸要因が、彼女の生命力を活性化させていた。オーラの生成量を増やしていた。それは、エリスにとっては致命的だった。

予想はしていた。しかし、予想より遥かに増加幅が大きかった。

川で汲んだ水を飲ませ、震える体を抱き締めた。一刻も早くオーラを解放する必要がある。僕はエリスを背に乗せて、洞窟を探して島を駆けた。深い洞窟の奥にエリスを配置し入り口を堅で塞げば、オーラの大部分が地中に吸われて人体や生態系の影響は最小限ですむはずだった。

なのに、どうしてこの道化は邪魔するのだろうか。

「いやあ。いい夜だね」

現れたヒソカは上機嫌だった。胸元には四枚のプレート。予想通り三八六番は入手していたが、なぜか四十四番がない。まあ、それもどうでもいい。今の僕は気が立っていた。しかし、エリスが合格に近付くためには、こんな機会でも活用しなくてはならない。

「ヒソカ、三八六番を置いていけ。代わりに二枚くれてやる」

「いいよ、これかい」

あっさりと交渉が成立する。お互いにプレートを投げ合って、間違いない事を確認した、

「それで、何か用か？ 見ての通りこっちは火急なんだ」

「クツクツク。怖い怖い。あいにく君には用がないよ。今日の目的はエリスさ。彼女、ボクのターゲットなんだよね」

「お前の主目的はプレートか？」

「まさか」

お馴染みの、喉奥での笑いが癪に触る。確かに今夜はエリスと戦う絶好の機会だろう。こいつの嗅覚が恨めしかった。タイミングが余りに最悪すぎる。

「なら、僕を倒してからにしろ。言いたい事はそれだけだ」

「いいよ。前菜に君も味わってあげる」

エリスをそつと地面に寝かせる。涙に濡れる頬を撫で、汗に張り付く前髪を避けてから僕はいった。

「少しだけ、我慢してくれないか。ごめんな」

濡れた瞳で僕を見つめて、エリスは小さく頷いた。

「さて、またせたな」

「もついいのかい？」

「ああ、後はお前を倒してからだ」

「そんな目で見るなよ。勃っちゃうじゃないか」

戯れ言は無視して指先に硬を施し、超高密度念弾を出現させる。

体外に顕在可能なオーラの大部分から全てを集中させたこの念弾は、およそ全ての念的な防御を貫ける上、追加で処理能力をさけば体内炸裂やファイア・アンド・フォーゲットなど諸々の性能を付与できる。しかし、致命的すぎる弱点があった。

かなりの処理能力を必要とするため、生成する際に一瞬の硬直時間がある。その一瞬は、戦闘中には限り無く長い。オーバークロック中でさえ当たり前前に避けるヒソカだ。通常状態ではまずあたるまい。

逆に、今のようにならかじめ生成した場合、体外に顕在可能な才一ラを費やしてしまっているため、念弾の代償に身体強化の効率および限界値が著しく下がる。ヒソカが身体強化なしでとっておきの念弾を当てられる程度の能力者なら、僕ははじめから苦勞してない。

このため打撃力としての使用は実質的に足留め役がいる場合に限られており、一対一の戦いでは相手に回避を強要する手段として使う事がほとんどだった。だが、今回はこれでヒソカを始末する。

「どうしたんだい？ そいつはもう見せてもらったよ？」

「ああ。だけどこの先はまだだろう？」

言つて、僕は【無色透明な黒色塗料】ファントム・ブラックで全身を漆黒に塗装した。闇色の保護色。人体に毒にも薬にもならないからこそできる使い方だ。更に念弾を再び体内に吸収し、全身を完全に絶にする。

自動防衛管制、4 / 6 「連続最大警戒」

戦闘用体術タスク「モード・アサシン」

ギタラクルの行動記録を分析したデータから開発したモードだった。処理能力を多く食うのが難点だが、スムーズで堅実、かつトリッキーにして威力抜群と、冗談みたいな性能を誇る。そしてなににより、隠密性が異常に高い。足音をたてずに疾走し、空気を揺らさずに拳を振るえた。

「へえ」

とるべきは無型の構え、自然体。肉体を透明に。心を冷水に。自身の全てをヒソカを殺す機械に集約させ、僕は鼓動の中に埋没した。

「なら、ボクも見せてあげる」

ヒソカの体を覆う堅が、その様相を少し変えた。粘着質のオーラ。それが幾筋も巻き付いていく。ヒソカの腕に、足に、胴体に。まるで外付けの筋肉だった。知っている、と僕は直感的にそう思った。

【マリオネットプログラムコッペリアの電腦】が回答をはじめ出す。

「あのとときの、ボディーブローの正体が」

「正解」

予測できなかつた衝撃。ありえなかつたはずの打撃。それを為したのが目の前のあれだ。収縮した瞬間、恐ろしいほどの瞬発力をヒソカに与える新たな応用技。あれほどポジション取りに専念して反撃を封じたはずの僕を、自分の胴体を強引に捻る事で打撃可能な位置へ持つていった脅威の性能。連発はできないだろう。精密な制御も無理だろう。しかし、パワーだけで全てを補える悪魔の発想。

あまりの事に戦慄した。推測だが間違いない。僕は確信し、断言する。参考にしたのは僕の能力だろう。前々から何かを掴みかけていたかもしれない。しかし、確実に言える。ファントムブラックをぶちまけた瞬間、僕が何かを仕掛ける事が決定的になったその刹那、あいつはあれを編み出したのだ。

きつとかなわない。そう思った。

それでも、エリスを渡すわけにはいかなかった。

僕の全てを捨ててでも、彼女が笑っていられますように、と。

音は、なにも聞こえなかった。

ただ、星空だけが瞬く世界で、僕とヒソカは衝突した。

念弾はヒソカの肩をわずかに掠め、拳は僕の心臓を打ち抜いた。

「残念。いい線いってたけど、ボクに通用させるには経験不足だよ。出直してきな」

崩れ落ち、地面に吸い込まれて倒れるとき、そんな言葉をかけられた、気がした。

意識を失っていたのは何時間か、何分か、何秒か。【コッペリアマリオネットのプログラム】に問い合わせても答えがない。心臓の拍動が著しく不安定で、オートで立ち上がった自己修復プログラムが復旧にオーラと処理能力を再優先で割り当てられていた。それでも回復できるか分からなかった。マスター権限でその活動を妨害すれば、数秒かからず不可逆領域を超えるだろう。

「……アルベルト？」

エリスの声がする。熱にうなされ蕩けたままの、エリスの声が。返事をしたかった。生きてる事を伝えたかった。心配ないと強がり

たかった。

「彼ならもういないよ」

「ヒソカ。アルベルトを、殺したの？」

「どうだろうね。心臓は止まったみたいだけど」

「……そう」

エリスの声は素っ気ないほど冷たい。底冷えのする声色だった。

「いつか、こんな日が来ると思ってたわ。いつか、必ず来てしまつと。……本当に、馬鹿なんだから」

頭は動かず、ぼんやりとした視覚だけで、エリスの様子をうかがおうとした。せめて姿だけでも見たかった。

「クツクツク。それで、キミはどうするんだい？」

「もし、それが本当なら。……もう……」

僕は必死に手を伸ばそうとした。数秒先の死などどうでも良かった。ただ、それだけはいけないと、その意思だけを伝えたかった。お願いだ、どうか。自己修復プログラムが処理能力を占有しすぎていて、介入すらくくにできなかった。エリスのオーラが解き放たれ、蒼白い光が闇を満たした。全ては無意味で、無駄だった。

青の光翼。あれは単体ではひどく無能だ。しかしエリスの能力の中核でもある。他の二対の翼が出現する前に止めないと、エリスは全てを失うだろう。人の強い意志を実現させる念という力。エリスのそれには、彼女が望まぬ強力な指向性がある。それこそが全ての元凶だった。

だいぶ視界が戻ってきた。

エリスは青の光翼だけでヒソカと戦っていた。僕の所へ駆け付けようとするエリスと、それを妨害する形で戦うヒソカ。オーラは圧倒的にエリスが勝り、技量は圧倒的にヒソカが勝る。その結果は、ヒソカが完全に不利だった。歓喜に震えるヒソカが見えた。

やがて、まとわりつくヒソカを強かに打ち払い、エリスが僕の所まで飛んできた。未だ指先さえ動かせない。抱きかかえられた僕はエリスと目を合わせ、ただただ強く抱き締められた。

「よかった……」

二人の身体を翼が包む。それはエリスの匂いがした。暖かくて、優しくて、頼もしかった。翼を構成する羽の一枚一枚が、比類なき密度のオーラの塊だ。この中は本当に二人きり。ヒソカに手を出せる道理がなかった。これだけオーラを消費すれば、エリスの体調も戻っただろう。危険きわまりない方法だが、結果としては最良だったのかもしれない。ようやく機能し始めた口でそう伝えると、泣きじゃくるエリスに叱られた。

「仕方ないな。今夜は二人でお幸せに。これじゃあ、ちょっと手を出せないしね」

この場を去るヒソカの、そんなセリフが耳に残った。

第四次試験に合格した受験者は十名だった。そのうちの八名が新人で、これはとても多い数字らしい。合格した僕達は飛行船で最終

試験会場へ向かいつつ、三日間の休養をとった。体力の回復、傷の処置、衣類の調達や他の受験者との交流など各自思い思いの時間を過ごしているうちに、三日間はあっという間に過ぎ去った。

最終試験はたった一勝で合格できる負け上がり方式のトーナメントだという。武器の使用は可、反則無し。ただし相手を死傷させた場合のみその場で負けになる。組み合わせは道中行われたネテロ会長との面接を参考に、これまでの試験の成績等と合わせて決められたそうだ。この試験方法を聞いた時、僕は最良の結果を確信した。

それを油断と呼ぶのだと、そのときの僕は気づきもなかった。

第六話「ヒソカ再び」（後書き）

セラフイムウイング
【色なき光の三原色 特質系・具現化系】

使用者、エリス・エレナ・レジーナ。

赤の光翼

具現化した光に

緑の光翼

青の光翼

具現化した翼に生命力を溜め

長い をかけて鍛えられた、

敗作。

ための能力の失

第七話「不合格の重さ」

秒針が時を刻んでいる。エリスの腰まで届く髪は柔らかく、窓から差し込む陽光を浴びて淡い金色に輝いていた。この優しい髪色が好きだった。優しく丁寧にも何度もブラシで整えてから、リクエスト通りの髪型に編み上げていく。袖を通しているのは今朝方届いたばかりの淡い緑のドレスだった。大人びた黒と違い歳相応の可愛らしさのある色だが、同時に落ち着いた上品さも合わせ持っていた。もちろん背中は大大きく開いている。

肩に落ちた糸屑を払い、ネックレスとポシエットを着けて完成だった。姿見の中の自分に満足したのだろうか。エリスも満足そうに微笑んだ。この後に控えた最終試験、それさえ受かれば合格だった。ようやくここまで来れた。後一つ。是が非でもそれを通過しなければならぬ。僕はエリスの肩に手を置いた。

「アルベルト。その……、心臓はもう、大丈夫？」

エリスが不安そうにおずおずと聞く。あの夜からずっとこんな感じだ。目の前で直接死にかけたのがまずかったのか。エリスは何かにつけて僕の容態を心配し、安静に休ませようとする。食事もベッドの上でとらされる有り様だった。

しかし僕の身体に問題はない。あれから三日が経っている。心拍は完全に安定していた。それを証明してみせようと、エリスを腕の中に招き寄せた。

「大丈夫だよ。ほら、聞いてごらん」

「……うん」

胸に耳をあて、僕の鼓動に聞き入るエリス。その表情はとても真剣で、何かを祈るように厳かだった。しばらくの間そうしてから、ようやく安心したのだろうか、徐々に力が抜けていくのが分かった。

「もう、無理しちゃ駄目よ」

「善処するよ。これでいいかい？」

僕の返事を聞いたエリスは、何故か、泣きそうに顔を歪ませた。

ハンター協会の管理するホテル内部の巨大な部屋、最終試験会場で待ち受けていたのは、勝ったものが外れ、負けたものが次へ進むという変則的なトーナメントだった。発案はネテロ会長本人らしい。不合格者はたった一名。もはや選別するつもりがあるとは思えなかった。では、この試験は何を目的としているのだろうか。

わずか一名といえ十人の内の一割だ。能力を試して選別するには少なすぎ、余興で落とすには多すぎる。今年の新人戦力の一割を削ってまで、協会がやりたい事とは何だろうか。

今までの試験の目的は明瞭だった。基礎体力およびハンターとして最低限の自己防衛能力。観察力、情報収集能力、決断力。チームプレー時の能力及びより実戦的な環境下での総合力。そして対人ハントの実地試験。しかしこの試験には目的が見えない。それが少し不安だった。

考えているうちに名前を呼ばれた。第一試合は僕とヒソカだった。

不合格

アルベルト

ヒソカ

ゴン

ギタラクル

エリス

クラピカ

ハンゾー

トンパ

キルア

レオリオ

アルベルト 対 ヒソカ

マスタと名乗った立会人の指示に従い、部屋の中央でヒソカと相対した。これが第一試合という事もあって、周囲は固唾をのんで見守っている。受験者の中でも上位に入る戦闘力の持ち主同士の戦いという事情もあるのかもしれない。しかし、彼らが期待するような展開にはならないと断言できた。

率直に言おう。僕は負ける気満々である。エリスとの対決まで負け進み、彼女の合格を勝ち取ってから次の試合で勝利する。最終試合で当たる可能性がある受験者はクラピカ、ハンゾー、トンパ、キルア、レオリオ。彼らを侮るつもりは微塵もないが、例え五人が束になっても圧勝できるだけの実力差があった。エリスは確実に合格し、僕も恐らく合格できる。試験の空気は確実に白けるだろうが、もはやそれも些事ではない。

ヒソカが一枚のトランプを取り出し念を込めた。振りかぶり、腕に例のオーラを張り付ける。試合開始と同時に仕掛ける気か。その準備も、楽しそうに笑うその笑顔も、もうすぐ無駄になるだろう。

開始の宣言と同時に僕は口を開き、ヒソカはトランプを投合した。なぜか、真横へ向けて。

マリオネットプログラム

【コツペリアの電腦】が軌道を予測する。その先にはエリス、着弾予測位置は頸動脈。間違いなく最悪の展開だった。理由を考えてる暇はない。オーバークロック2始動。安全係数の設定が全て解除され、処理速度のみならず筋力とオーラの体外顕在量を極限まで上昇させる。プログラムで再現した火事場の馬鹿力。それがこの設定の正体だった。

右足の硬で床を蹴り、飛翔するトランプに追い縋った。蹴り締めた床が爆砕される。遅い。速度差があまりに少なすぎた。空気の粘性が強すぎる。乱流が邪魔だ。念弾発射用意、目標撃破までコンマ八秒。却下。絶望的に遅すぎる。このまま何もできないのか。皮肉なほど緩やかな時が流れる中、トランプは吸い込まれるようにゆっくりとエリスに迫り、……隠で張り付いていたオーラが収縮し、ヒソカの手元に戻っていった。

呆然としながらも床を殴り、反作用で軌道を修正、エリスとの衝突を回避した。勢いのまま天井に着地し、表面を盛大に削って減速する。

「まいった。ボクの負けだ」

間延びした声を確かに聞いた。誰も彼もが啞然としている。時間が凍った心地すらした。あの奇術師はこの瞬間、間違いなくこの場を支配している。それが無性に悔しかった。

オーバークロック2 解除

十分に勢いを減じさせてから、僕は床に降り立った。何が起きたか、考えたくもない愚かな失態。僕はあまりに間抜けだった。油断するにも程があった。なんで、一番重要な最終試験でミスをするのか。今すぐ頭を叩き割りたい気持ちだった。

「しよ、勝者アルベルト・レジーナ！」

静まり返った会場で、立会人が職務を果たした。周囲がざわつき、視線が飛び交う。この瞬間、僕の合格が確定し、僕の思惑は無惨に散った。なにも言わず、なにも問わず、心底嬉しそうに抱きついて祝福してくれるエリスの優しさが、今はとても辛かった。

クラピカ 対 ハンゾー

その試合は順当に始まり、順当に破綻し、至極順当な結末を迎えた。

オーバークロック2を使用しつつ最大負荷での戦闘機動という、脳を物理的に損傷してもおかしくない無茶をした僕は、自己診断プログラムをセーフモードでゆるゆると走らせていた。実のところ、立っている事さえ好ましくない。オーラの残存量が四分の一を切っている。処理能力制限で思考領域が圧迫され、さっきから目眩が止まらない。しかしここで座り込んでしまったら、エリスは確実に動揺する。試合を控えた大切な妹に、そんな負担をかけられるはずがなかった。

部屋の中央ではクラピカがハンゾーに打ちかかっていた。一対二

本の木剣を長めの紐で繋いだ特徴的な武器を、縦横無尽に振るっている。あるときは鞭の如くしなやかに、あるときは槍の如く鋭い突きを。あれでは間合いが読みにくい。次々と繰り出される打撃は的確に体重を乗せており、木剣といえども一撃の重さは十分だろう。それを、ハンゾーは全て捌き続けていた。

分析機能は休止しているが、明らかにクラピカはハンゾーに勝負してもらっていた。クラピカに能力を見極めさせる為だろう。ハンゾーに受け身に廻ってもらえれば勝負が成立するほどにクラピカは強かった。しかし、だからこそ本人は実力差を実感せざるを得ないのだ。

「……頃合いだな」

呟いて、ハンゾーの動きが切り替わった。全身のバネを使った躍動感のある体術。それで後背に回り込んだ。恐らく、クラピカには消えたように見えただろう。慌てて振り向くクラピカの手中から、一対の木剣が弾き飛ばされた。ハンゾーが踏み込み、強めに腕を振り抜いたそれだけで。

「これだけやれば分かった。オレ達の实力は違いすぎる。早いところ降参しとかねーか？」

「断る！」

「おいおい、オレはお前さんを話の分かる男と見込んでこんな事をしたんだぜ？ 分かるだろ、なあ？ ここで体力の消耗を最小限に押さえておけば、あんたなら確実に合格できる。な？ お互いその方が得なんじゃねーか？」

「……くっ」

理性では分かる。しかし納得は絶対にできないとも言つように、

クラピカが奥歯を噛み締める。そんな二人の様子を見て、僕は会長がこの試験でやりたかった事を、だいたい察する事が出来た。

名付けるならそれは生け贄の宴。僕はちらりと会長を見る。外見は飄々とした老人だが、なんとも性格の悪い人だった。

「……なあ。オレもお前も、この場だけの強いとか弱いとかどうでもいいじゃないか。そりゃ、俺だって実力には自信があったけどよ、世の中にはどうしようもねー化け物がいるんだって思い知ったばかりだしな」

小指の先で耳の穴をほじくりながら、ハンゾーは僕に対して視線を向けた。否、むしろあからさまに睨んできた。なぜそこで僕なのだろう。返す返すも悔しい限りだが、先ほどの一戦は明らかにヒソカが上手だった。これでハンター試験中、彼にはしてやられっぱなしだった事になる。本当に、悔しい。

……いや、派手に動いたのは僕だったか。

なるほど、確かに分かりやすい例としては僕の方が適切だろう。しかし彼らは遠からず知る事になるのだ。念能力という、僕達が使った奇術の正体を。そうなれば、僕らも楽に勝たせてはもらえなくなる。

結局、クラピカが降参したのは、それから十秒ほど経った後だった。

キルア 対 レオリオ

「っていうかさ！ 組み合わせがぜってーおかしいって！ 何考え
てんだあの爺さん！ ありえねーだろ！」

試合中だというのに、キルアは盛大に愚痴を撒き散らしていた。
レオリオというお父さんにお菓子をねだる駄々っ子のようだ、とは
僕だけが抱いた感想ではないだろう。エリスも隣でクスクス笑って
いる。

「うっせークソガキ！ ちっとは真面目に戦いやがれ！」

「わかった、よっ！ と」

「ってーな！ 蹴る事ねーだろ！」

もうまるつきり漫才だった。会場のそこかしこから笑い声が漏れ
る。エリスは口元を隠しつつ、「淑女の笑い」の範疇で納めようと
必死になって堪えていた。さぞかし腹筋が鍛えられる事だろう。

なんでも、キルアは弱い受験者とはかり当たるトーナメントの組
み合わせが許せないそうだ。彼の見立てでは最初にレオリオ、それ
で負ければトンパ、最後に当たるだろう相手がエリスとの事で、ハ
ンター試験に面白さを求めて参加した少年の目論見は、見事に崩れ
る事となったらしい。だって一番マシなのがレオリオだぜ！？ と
は本人の弁。クラピカがもうちょっと頑張つてハンゾーを叩き落と
してくれてたらなー、とも言っていたが、すぐに何かに気付いたの
かトンパを見て、わりい！ と謝っていたりもした。トンパの頬が
ひくついていた。

二人はそうやって数分間、じゃれあいの戦闘を続けていたが。

「ま、いつまでも遊んでいてもしやーねーか。オイ、キルア。次で

最後にしようぜ！ 攻撃を先に当てられた方が負け。四の五の言わずにまいったと認める。どうだ？」

「ん？ ああ、いいぜ」

二人の間の空気が変わった。キルアが裏の人間の顔になる。鋭利なナイフを人型に産み、丁寧に研磨し育て上げた姿だった。少年の奥底にたゆたう純正の闇。それに正面から対峙できるレオリオも流石だ。武器、兵器、拷問具。鑑賞するにはいい。しかし使用する意志を持ってそれらを己に向けられたら、誰もが必ず怖気を抱く。

傷つけることに特化した道具から放たれる殺意はとても怖い。それが人として当然の感性だ。そうでない人間の方が異常だった。レオリオも確実に正常の側だろう。キルアの性能を感じ取れないほど、鈍い人間にも見えなかった。

しかし、彼は怯まない。

カモ、技も、オモ及ばない。もちろん念使いであろうはずもない。彼は特別な何かを何も持たず、自分の人格だけであれに立ち向かっていけるのだ。普通を許容できる人間はとても強い。それは、魂そのものの強さだった。

「はい、オレの勝ちね」

「だーっ、ちきしょー！ おい審判！ オレの負けだ！ こんちくしょー！」

ほんの少し、彼の強さに憧れた。

無性にエリスを抱き締めたい気持ちだった。

不合格

ヒソカ

ゴン

ギタークル

エリス

クラピカ

トンパ

レオリオ

ヒソカ 対 ゴン

ヒソカが、とても、輝いていた。

なんとも楽しそうな顔だった。奴は少し、人生を謳歌しすぎている気がする。一方でゴンも楽しそうだった。釣り竿を握りしめ、ヒソカと対峙する表情が語っていた。オレは今、ゾクゾクするスリルに身を焦がしているのだと。

「やあゴン。準備はいいかい？」

「ああ。いくぞっ！」

愛用の釣り竿をゴンが振るい、重りと呼ぶには大きすぎる鉄球がヒソカを襲う。あやまたず顔面に飛来するそれを避けようとせず、ヒソカは優しく受け止めた。もとより当たるとは考えてなかったのだろう。次の瞬間、既に懐に潜り込んでいたゴンは、釣り竿のロッドで打ちかかる。棒術。いや。ただの子供の思いつきか。それにしても腰がよく入っている。自分の身体の使い方、あの歳で既に感覚として得ている。

二撃、三撃と繰り出されるゴンの攻撃を、ヒソカはいなし、受け止め、存分に味わい遊んでいた。ヒソカの顔が愉悦に歪む。なんとも形容しがたい表情だった。まるで美味しそうなお菓子を目の前にして、食べたいがとつてもおきたい少年のような。

「あっ!？」

ゴンの手から釣り竿が滑った。放物線を描いて飛んでいく。見学者が一斉に注目する。が、次の瞬間。

「え、消えた？」

「エリス、上だよ。ほら」

ゴンは高く跳んでいた。隙をつき、顎を狙った跳び膝蹴り。意図的な武器の放棄による意識の誘導か。それほど斬新な手ではないが、選択のセンスがかなりいい。そして素晴らしいバネだった。躲したヒソカも大喜びで、ネテロ会長も頷いていた。

「あーあっ。もうちょっとだったのに」

悔しがりながら着地した。これもゴンの強さだろうか。子供らしい柔軟な発想を実戦でどんどん試す事ができる好奇心。ゴンはきつと、戦闘そのものに何の他意も持っていない。だから無邪気に追求できる。彼が暴力に怒るとしたら、それは行為そのものではなく害意と結果についてだろう。

「クツクツク。やっぱりいいね、キミは」

ヒソカも大満足の様子だった。どうやら、僕が予想した以上に気に入ったようだ。無理もない。恐ろしいほどの素質。果ての見えな

い将来性。それはきつと、高みにいる人間ほど良く見える。僕よりヒソカの方がゴンに興味を抱くのも、至極当然なんだろう。

「さあどうした？　今ので終わりかい？」

「まだまだっ！」

言っで、ゴンの攻撃が再開された。勝とうとしてる様には見えなかった。ヒソカという実力者から少しでも盗み、アイディアを試そうとする戦い方。まだ戦えてる事自体に喜びを見出し、自分の成長を喜んでいる。そんな推測さえ浮かんだ二人の戦闘は、やがてヒソカの芯を捕らえたアッパーによりゴンが優しく気絶させられた時点で終了した。

「もつと鍛えな。ボクにプレートを返せるように」

意識を失ったゴンにそう投げかけて、ヒソカが敗北を宣言したのだった。

クラピカ 対 トンパ

「まいった。オレの負けだ」

開始して二分も経たないのに、トンパが突然降参した。試合のほとんが間合いの駆け引きと小手調べの小競り合いだった。両者ともろくな有効打を与えていない。

「……………いいのか？」

「ああ、お前とオレとじゃ地力が違う。格下だと油断していれば隙

を見て勝負を挑むつもりだったんだが、そんな様子も全然なかったからな。せっかく三回もチャンスがあるんだ。これがオレの戦略さ」「分かった。ならば私は何も言うまい」

立会人が勝者を宣言する。お互いに軽く頷きあい、歩み寄って握手を交わした。

「ハンター試験合格、おめでとさん」

クラピカを祝福するトンパの姿は、妙に小さく、寂しそうに見えた。

不合格 ヒソカ

ギタラクル

エリス

トンパ

レオリオ

ヒソカ 対 ギタラクル

今日はヒソカの日なのだろうか。嬉しそうにギタラクルと対峙するヒソカを見て、僕はそんな馬鹿な事を考えた。

二人は見つめあったまま何も言わない。オーラも静かに波打っている。

「まいった」

しばらくして、ヒソカが退いて試合は終わった。

しかし、それからが問題だった。ギタラクルは会長にこれで合格は確定かと尋ね、肯定されると何を考えたのだろうか、寛ぎながら観戦モードに入っていたキルアの元に訪れた。

「や。奇遇だね、キル」

「は？」

いぶかしむキルアを無視し、頭部の針を抜きはじめるとギタラクル。軋み、変形していく頭蓋骨。おもわずエリスの目を隠した僕の判断は、きつと間違ってたんだろう。死体などとは方向性の違う、常識を冒涇するようなグロテスクさを含んだ光景の後、一人の青年が現れた。後で知ったがこの男、本名をイルミソルディックといい、キルアの実の兄らしい。

立派に成長してくれてうれしい、それとなく様子を見てくるように頼まれた、など物騒ながらも家族らしい会話を繰り広げた後、ギタラクルはキルアに問い質した。なぜハンター試験を受けたのかと。

「別に、理由があつた訳じゃないよ。ただなんとなく受けてみただけさ」

「……そうか、安心したよ。心置きなく忠告できる」

お前はハンターに向かない。ライセンスをとってしまったのは仕方がないが、天職は殺し屋だから家に戻れと告げるギタラクル。その言葉はある意味で正しいだろう。ハンターとしてのキルアの才能は未知数だが、殺し屋としては間違いなく一級品だ。門外漢の僕でさえ分かるのだから、真実は更に上かもしれない。だけど、僕はギ

タラクルの態度が気に入らなかった。エリスが僕の腕にギュツと抱きつく。彼女の頬に掌をあてた。

家族は、お互いに尊重するべきだと思うのだ。

二人の話は進んでいく。ゴンと友達になりたいという内心を吐露するキルア。頭から否定するギタラクル。その関係はきつと歪だ。しかし、彼らが殺し屋という家庭事情だから特別に見えるだけで、世の中にはもつと歪な家族関係が五万とある。部外者の僕が横から口出しする理由にはならなかった。

ただ、説得の技術として見た場合、ギタラクルの手腕は最悪だった。やらない方がマシだった。僕も職業柄、数々の交渉現場を見たり参加したりしてきたが、あれほど高圧的な態度はさぶの素人以外に見た事がない。恐らく彼は生つ粹の殺し屋で、それも実動専門なのだろう。本人としては兄として弟を導くべく精一杯頑張ってるつもりなのだろうが、力技以外でキルアの同意を得れるとは思えなかった。むしろギタラクル自身に力技以外の落とし所が見えてない。

これではそもそも説得ですらない。相手の同意を得るつもりが全くなく、自分が何を実現させたいかも把握してない。それではキルアは傷付くだろう。それを見たエリスは悲しむだろう。エリスが僕を見上げていた。その瞳が揺れていた。言葉はなにもなかったが、願いを断る術はなかった。

金の髪をそつと撫でた。エリスは一緒についてきたが、僕は首を振って諦めさせた。万が一戦闘になった場合、守り切る自信がなかったのだ。大丈夫、戦う気はないよ。そう囁いてから腕を離れた。

ついにギタラクルはゴンを殺そうと言い出した。実にあっさりした決断だった。試験官の一人を殺しながら情報を聞き出し、隣の控え室へ向かう彼の目は本気だった。クラピカとレオリオ、そして黒服達が扉の前に集う。

オーラの残量が心許ない。【コツマリオネットプログラムペリアの電腦】は戦力にならない。それでもいい。行こう。エリスが望んだ。それ以上の理由は必要なかった。

「クラピカ、レオリオ、すまないがここは譲ってくれ」

扉の前に立ち塞がる二人を宥めて下がらせる。たとえ実力差が明瞭でも、彼らは怯まず立ち向かうだろう。そして必ず死ぬだろう。

「ちょっといいかな」

「なに？ 邪魔するの？」

「まあ、そうなるね。エリスが、ゴンを殺して欲しくないそうだから」

額に針を三本刺された。いや、気が付いたら針が生えていた。全く反応できなかった。セーフモードの【コツマリオネットプログラムペリアの電腦】で対抗できる相手じゃない。脳神経の結節が三つ、的確かつ最小限に刺激されていた。自己診断プログラムに一時停止を命令し、バイパス経路を構築させる。与えられたダメージは面倒だが、得られた情報は重要だった。彼自身や試験官に使用した際の事も合わせて考えると針を刺した対象を操作するタイプの能力だろう。暗殺に関わる何らかの技術、恐らく拷問術と念能力の組み合わせか。使い勝手はよさそうだった。

「気がすんだかな？ 残念だけど、僕にこの手のものは効かないん

だ。早い者勝ちだよ。知ってるだろう？」

余裕を装い、面倒くさそうに針を抜きながら言ってみる。僕の動揺は外部に漏れない。周りにいた人間が驚愕し、ギタラクルもわずかに目を見開く。固まっていたエリスが息を吐いた。だが、実際には厄介な攻撃だった。操作ではなく破壊主眼でこられたら、今の僕には対処できない。今のうちに場の主導権を握りたかった。

「ネテロ会長、よろしいですか？」

「うむ、なにかの」

この場を預かる責任者だというのに、先ほどからずっと傍観に徹していたネテロ会長に話を振る。

「これから彼、ギタラクル……、は偽名だったよね」

「イルミィゾルディック。イルミでいいよ」

「どうも。イルミがキルアの為にゴンの殺害を試みるより、両者共に満足度の高い解決手段を提案したいと思います。そこで一つ、わがままを聞いて頂けませんか？」

「さて。どうだかのう……」

顎ヒゲをさすり、とぼける会長。だいたい分かった。部下を持つ身が故の優柔不断や世渡りの秘訣などではなく、この人はこういう性格だ。

「ご助力頂けるならプロハンターの方をお一人お貸し下さい。彼らの問題が平和的に解決できるなら、それが一番ではないでしょうか？」

「しかたないの、ワシが行こう。ブハラ試験官、この場を任せる。試験再開じゃ」

会長の案内で別室に移動する。張本人のイルミとキルアに対しては、あえて確認をとらなかつた。キルアはともかく、イルミは現状で話し合いに応じるメリットは低いと思ってるだろう。ネテロ会長と僕が組んだ場合の戦力計算と、本当にゴンを殺すなら立ちほだかるだろうヒソカとの戦いの想定、後は単に話の流れだったからという理由だろうか。そのような状態の彼の前に、話し合いに応じないという選択肢をぶら下げたくはなかつたのだ。

こうして会長と僕を交えつつ、イルミとキルアの話し合いが再開した。僕が司会を勤め、話す役と聞く役を明確に分けたのが良かったのだろう。今度は相手の話に耳を傾け、お互いの立場を知る機会を得た。双方、目の前にいるのが言葉の通じる動物である事を再認識できたのだった。

元々、兄弟仲はそこまで悪くはなかつたのだ。イルミがキルアを心配し、キルアがイルミに内心の願望を吐露できるぐらいには。用意してもらった甘いお菓子も、心をほぐすのに役立つたかもしれない。

結局、これから控えるイルミの仕事が終わり落ち着いた所で、彼らの父や祖父を交えてもう一度話し合う事でまとまった。

やっぱり、家族は仲良くするべきだと思う。

「会長、ありがとうございました」

「うむ。悪い結末ではなかつたの」

「ええ、全くです」

彼らを部屋に残したままの帰り道、僕はエリスの事が気になって

いた。トンパ対レオリオの戦いが終わったら次はエリスだ。対戦相手がヒソカに決まった時点ですぐに降参するよう言い含めておいたが、何故か本人は不満な様子だった。エリスなら、最終試合で確実に勝てると思うのだが。

嫌な予感がした僕は、会長にもう一つお願いをした。

トンパ 対 レオリオ

「二時間以上外していたはずなんだけど……」

「ご覧の通り、レオリオの試合は続いているよ。それよりキルアの件はどうなった？」

「エリスが来てから話すよ。ほら、向かってきてるから」

「わかった、頼む」

会場に入るなり寄ってきたクラピカに促され、僕は事の顛末を説明した。二人ともそれを聞いて大いに喜び、よくやってくれたと感謝された。レオリオもクラピカが見せたサムズアップにより概略を知ったようだ。殴られて腫れ上がった顔でサムズアップを返していた。そう、レオリオにはそれぐらいの余裕があった。

一方でトンパはぼろぼろだった。顔面こそレオリオ程は腫れてないものの、全身の動きが明らかに鈍い。医者を目指するレオリオならば、身体能力に響く部位へのダメージの与え方も押さえていたのだろうか。

しかし、僕は内心意外だった。トンパの話はトリックタワー内部を攻略中に、ポックルとポンズから色々聞いた。十歳の時から八

ンター試験を受け続け、今年で三十五回目を数えるベテラン中のベテラン受験者。だがその実態は新人潰し。なにも知らないルーキーを潰し、他者の絶望を間近で眺める事を趣味として、攻略以上に精を出す異色の人物。いや、噂では既に合格する気もないらしい。聞けばエリスも一次試験前に怪しげな缶ジュースを勧められたという。

そんな人物が最終試験に残ったと知ったとき、僕は何かの作用でひよっこりと勝ち抜いてしまったのだと推測した。であるなら、勝利に固執する事はないとも思った。クラピカ戦の結果もそれを裏付けていた。

正直に言おう。僕は彼こそを不合格予定者として計算していたのである。

ところが彼らは二時間以上殴り合いを続けている。若く体格にも恵まれたレオリオは分かる。気力体力共に充実してるし、なにより彼にとってこれは勝てる戦いだ。しかしトンパは違う。四十路を廻って衰え始めた肉体で長時間、勝ち目のない戦いを続けている。何かを企んでいるにしろ、いないにしろ、合格を目指さない男がこれだけの事をできるだろうか？

「おらっ！」

レオリオの拳が鳩尾に突き刺さる。たまらずにトンパが崩れ落ちた。四つん這いになって床を睨み、体内に反響する痛みに耐えている。レオリオは息を荒くしながらも、隙だらけのトンパを追撃しない。

「レオリオはなんで強引に畳み掛けないのかな？ 体力に任せれば可能だと思うけど」

「これは私の推測だが、お互いに満足のいく試合をしたいのだから。いや、違うな。今の言葉は撤回しよう。奴のあれは性格だ。はじめからあんな戦い方しか頭がない。レオリオはそんな男だよ」

クラピカの返答に僕も頷く。レオリオとの付き合いは短い、それが正しいような気がしたのだ。エリスが僕の手を握りしめた。

「っ痛！ まったく、後から響く嫌なパンチしてやがるぜ」

「あんたもな。体中痛くてたまんねーよ」

「よせよ。そう効いちゃいないはずだぜ」

起き上がりながら軽口を叩くトンパに、レオリオも軽い調子で合いの手を入れた。

「本当はな、あんたとは十分以内にケリを着けるつもりだったんだ。十分以内ならオレが有利、三十分までならほぼ互角、それ以上時間がかかったらジリ貧だと見ていた」

クラピカを見ると頷いた。実際の戦闘もそれとほぼ同じ推移だったらしい。正確な目算だったという事だ。これこそ、飛び抜けた実力もない男がハンター試験という舞台に立ち続ける事が出来た理由だろうか。

「それが、あと十分粘ってみよう、あと五分、あとパンチ一発位はつてな。おかしいよな。最終試験に残っちまったからって、そこそこでやめておく方針は変えなかつたはずなのに」

トンパの視線がレオリオの目を射抜く。レオリオは何をするでもなく、ただ正面から見つめ返した。

「なあ、レオリオ。教えてくれよ。何でオレ、オマエとまだ殴り合ってるんだ？」

それがトンパの問いだった。三十五年間試験を受け続けた男がもらした、一つの小さな問いだった。それに答えられるのは、きつと本人だけだろう。他人がいくら賢しげに語っても、トンパの心には響くまい。しかし、レオリオは当たり前前の様に口を開いた。

「んなの簡単じゃねーか。納得できてねーんだろ？ ならしょうがねえ。オレで良ければいくらでも付き合っぜ」

その気持ちはよく分かるしな、と付け加えて、レオリオはどんと己の胸を叩いた。そして痛み顔に顔をしかめる。どうやら肋骨にいくらかヒビが入っていたらしい。そんな二人の様子に、会場の空気が少し変わった。もしかしたらレオリオはハンターより教師の方が向いてるのかもしれないと、僕は益体もない事を考えた。

トンパが降参を宣言したのは、それから三十分ほど経ってからだった。

試合が終わり、痛む身体を引きずって部屋の隅へ向かうトンパに、ずっと見ていたハンゾーが一つ聞いた。

「なあおっさん。試験に合格したかったのなら、次の試合でエリスって女に勝てば良かったんじゃないか？」

トンパは立ち止まって少し黙る。振り向いたその顔は微かな笑みを浮かべていた。

「ハンゾー、これからハンターになるお前さんに、試験を三十五回

生き延びたオレが一つ教えてやるぜ」

「あん？ なんだよ」

「あのお嬢ちゃんが一番やべーよ」

不合格 ヒソカ

 エリス

 トンパ

ヒソカ 対 エリス

とうとうこの時が来た。僕は会長に視線をやる。向こうも目を合わせて頷いてくれた。ヒソカの意味など確認するまでもないが、エリスの方はどうなんだろう。

「エリス」

「……ごめんなさい」

そのやり取りだけで僕には分かる。それでも確認せずにはいられなかった。

「戦う？」

「ええ」

「なんでか聞いてもいいかな」

「だって、アルベルトに守られてばかりいたら、またあの時みたいになっちゃうじゃないっ！」

エリスが僕を見上げて悲痛に叫ぶ。ヒソカに心臓を打たれた夜の事だろう。それを持ち出されると、正直辛い。エリスの為に命をか

けるのはいつそ本望だが、心配をかけてしまったのは、言い訳のできない事実だから。

「エリス、一っだけ約束してほしい。危なくなったらすぐ降参する事。これだけは守ってくれないか」

「……うん」

妹の体を抱き締める。エリスは小さく震えていた。覚悟を決めよう。携帯電話の電波状況は確認してある。この部屋は確実に圏内だった。

「会長、お願いします」

「うむ。そのようじゃな」

手はずの通りをお願いする。ネテロ会長はこの試合を特例とし、立会人は自らが勤める事を発表した。その上で、当人達以外は待避するよう命令した。理由は周囲の危険が大きすぎることを鑑みてである。それを聞いて、ヒソカの唇が釣り上がった。

「僕も残ってよろしいですか」

「無論じゃ。残りなさい」

ざわめきが会場に広がるものの、やがて僕達を除く全員が退出する。広い部屋ががらんとした。避難部屋への誘導はプロハンター達が受け持っている。今頃は隣室のゴンも移動されているだろう。

「いいじゃないか。素晴らしいサプライズをありがとう」

ヒソカは上機嫌で笑っていた。既に室内には四人だけ。試合の準備は整っていた。

「アルベルト、ちょっと待って」

「どうしたんだい？」

「もう少しだけ、このままで」

断る道理はない。右手でエリスの肩を抱き締めて、左手で頭を優しく撫でてやる。見下ろす位置にある白い背中に、何故か、オーラが集まり波打っていた。

「……エリス？」

「大丈夫。平気よ」

纏が解かれた。淡い緑のドレスが軽やかに揺れる。背中が赤く発光している。そして翼が生えてきた。具現化された真紅の翼。美しくも不吉なエリスの発。大きさは片方三メートルほど。色を別にすれば、天使の姿にも見えただろう。やがて翼が発光を始める。

「ね？ 大丈夫だったでしょ？」

腕の中で微笑むエリス。まさかこれを使うとは思わなかった。しかしそれ以上に問題があった。発現があまりにスムーズすぎる。溢れてくるオーラの量も多すぎず、適切にセーブされていた。今までには、これほど気軽に発現できる能力ではなかったはずだった。エリスは明らかに成長していた。それも、ありえないほどのスピードで。ハンター試験という実戦の場に置かれたからだろうか。いや、それよりも。果たしてこの成長は、本当に喜ばしい事なのだろうか。僕は言い様のない不安に襲われた。

「驚いたよ。あまり無茶はしないでくれ」

「そうね、ごめんなさい」

頬を撫でて言う。エリスはくすりと小さく笑って、ヒソカと戦うために中央へ進んだ。肩からは例のポシエットが釣り下がっている。貧者の薔薇が仕込まれた卵の化石が。

「もういいのかい？」

「ええ。待たせたわね。ごめんなさい」

対峙する二人。ネテロ会長が開始を告げる。その直後、動いたのはエリスの方だった。軽やかざした手が発光する。次の瞬間、ヒソカに向け赤い光が放たれた。無論、ただの光であるはずがない。床と壁が陥没する。あれこそが赤の光翼のもつ特殊能力、光の速さの念弾である。

ヒソカはそれを紙一重で躲した。相変わらずとんでもないセンスだった。湿原で一度見ていたとはいえ、ほとんど初見に近いあの能力を、経験と勘だけで見破ったのだ。光を媒介にした生命力の授与回避の叶わぬ絶対の暴力を。しかし、エリスの攻撃がそれで終わるうはずもない。

「このっ！」

太い光での薙ぎ払い。正面がガリガリと削れていき、無惨な状況に成り果てる。ヒソカはそれを跳んで躲した。悪手だ。空中で避けられるはずがない。だが、奴の能力なら例外である。

オーラを天井に伸ばし収縮、更に上昇して追撃を避ける。直後に天井を蹴り斜め下へ跳躍。エリスの光が天井をひび割れだらけにした。ヒソカの三次元機動は止まらない。床、壁、天井にオーラを縦横無尽に張り巡らせ、あるときは収縮させ軌道を変え、ある時は恵

まれたバネで跳躍する。あの男の対G限界はどうなってるのか。そしてフェイント。動きに虚実を混ぜてエリスの思考を翻弄した。

しかしエリスも負けてはなかった。戦闘経験の無さを能力で補い、頑丈な会場を瓦礫の山に変えていく。両手から赤い閃光を迸らせ、ヒソカを追い詰めようと乱舞した。僕も会長も流れ弾の回避に大変だった。壁際に待避していて比較的安全とはいえ、直撃を喰らったら一大事だった。ホテルが崩壊するかもしれないと本気で思った。果敢に攻撃を仕掛けられるヒソカが異常なのだ。

いかに光速の攻撃とはいえ、エリスの思考速度は人間並でしかない。故に微かなタイムラグがあり、ヒソカはそこを上手くついていた。しかし反撃は尽く失敗した。投げ付けたトランプは蒸発する。エリスにオーラを粘着させても、発光する掌で千切られた。全身に大きなオーラ塊を被せ行動を制限しようとしたが、ひと撫でされて消滅した。

エリスの攻撃は逆二乗の法則により距離とともに拡散して威力が弱くなり、逆に近付けば強くなる。光をレーザーの様に集束させる事はエリスにはできない。能力を使う機会に恵まれず、熟達してないためだった。

「なら、これでどうだっ！」

ヒソカが辿り着いたのはカタパルトだった。部屋中に転がる瓦礫をオーラで飛ばし、その運動エネルギーで攻撃する。なるほど。あれならエリスも対処しづらい。部屋中を飛び回りながら投石するヒソカと、迎撃と撃破を試みるエリス。圧倒的な展開で始まった試合は、徐々に拮抗に向け傾いていった。

だがそれでも、エリスにはエリスなりに秘策があった。翼を広げ、四隅の一角に陣取り構える。なるほど、飽和攻撃か。悪くはない。しかしそれは、穴一つあれば回避できる。いや、もしかするとエリスの真意は……。

「建物ごと吹き飛ばしてあげるわ。ヒソカ、降参しなさい」

「クツクツクツ、やってみな？ と、言いたい所だけど」

脅迫としては、エリスの脅し方は三流だった。だが、ヒソカは笑って両手を上げた。

「まいった。降参するよ。これ以上やると殺しあいになっちゃうからね」

なんとも不吉なセリフだった。心中では殺しあいを望んでやまず、そんな意思を隠そうともしない。しかし、これで試合は終了した。エリスの背から翼が消える。良かった。とにかく良かった。エリスの合格が、やっと確定してくれたのだから。

不合格 ヒソカ

トンパ

ヒソカ 対 トンパ

やむをえぬ事情により試験会場を別の大部屋に移してから、最終試合の運びとなった。両者、中央に進み出て相對する。トンパは緊張で脂汗を流していたが、ヒソカはつまらなそうにトランプをシャッフルして遊んでいる。どうやら、彼には全く食指が動かないよう

だった。

「最終試合、ヒソカ対トンパ。始め！」

再び立会人を勤めるマスタが告げる。ヒソカは動かない。冷たい瞳でトンパを見下ろし、無言で早く降参しろと促していた。

「毎年、この時期になるとな、お袋がパンケーキを送ってくれるんだ。果物の砂糖漬けがたっぷり入ってて、子供の頃からオレの好物でさ。ハンター試験を受けるのに最後まで反対した人だけど、受験し続けたら一番応援してくれた人なんだ」

俯いたまま、トンパがぼつぼつと語りだした。

「出発する日にはかみさんが気合いの入った弁当を作ってくれてさ。最近じゃ娘も一緒に手伝ってくれて。それがまた旨くってよ。だけどオレ、試験に受かる事を諦めてたんだよな」

これが、会長がやりたかった事だろう。今まで脱落し、踏み台になつてきたものを分かりやすいスケールで再現し、脱落した者達に思いを馳せる。ある者は負ける側を体験し、あるものには踏みなじる側を体験させる。そう。最終試験は誰かを選ぶためのものではなく、一人を犠牲にして心構えを刻み付けるためのものだった。

「分かつちまうんだよなあ。オレがここまで残れたのもただの偶然で、こんな機会、この先二度と訪れやしないうて。その一度切りの最終試験が一人落ちるだけ、命の危険もないっていうんだからよ。……思い出しちゃったじゃねーか。合格を目差していた頃の気持ちってやつを」

トンパとて、ただの嗜好、ただの娯楽で三十五年間、受験し続けた訳ではないのだろう。衰え始めた身体を引きずり、日常生活と折り合いを付け、そこまでして欲しかった何かがあった。

「エリス、目を逸らしてはいけないよ」

「ええ、わかってる。……でも、こんなので」

震えながらも、エリスの視線はトンパから片時も離れない。そんな彼女の手を握って、二人の体温を共有した。

「せめて、来年来る連中への土産話に、あのヒソカを一発ぐらいは殴ってやりたかったんだが、足がすくんじまって動かねえ……」

顔をあげてヒソカを見つめる。怯えも恐れも見出せなかった。この瞬間、わずか数秒の間だけ、トンパはヒソカと対等だった。対等の気構えで対峙していた。そしてマスタに、ぽつりと降参を宣言した。

「勝ちたかったな……」

座り込み、静かに嗚咽を盛らずトンパ。静かに見守る者、胸に何かを秘める者、興味なさそうに立ち去る者。各人の行動はそれぞれだったが、笑う者だけは一人もいなかった。

第七話「不合格の重さ」（後書き）

セラフイムウイング
【色なき光の三原色 特質系・具現化系】

使用者、エリス・エレナ・レジーナ。

赤の光翼

具現化した光に生命力を付与する。

緑の光翼

。

青の光翼

具現化した翼に生命力を溜め

長い をかけて鍛えられた、

ための能力の失

敗作。

第一章 エピローグ「宴の後」

「人からもらった食べ物というのは、具体的にどの程度を示すのか聞いてもいいかな」

「あー。そうだな。最低でも、何も混入されてないとオレが確信できるのが条件だな。できれば食材の段階から自分で選びたいんだけどよ」

「それなら多分問題ないよ。ホテルの一室、キッチン付きのスイートルームを借りて皆で持ち寄り型式だから、ハンゾーも好きにやればいい。なんなら、もういくつか部屋を借りてしまってもいいだろうしね」

「おっ、そうか！ そいつはありがたいが、いやー、すまんー！ オレまで誘ってもらっちゃって！」

「気にする事はないさ。僕達は同期になったんだ。お互い変な遠慮は無しで気持ちよくいこう。じゃ、開始は二十時の予定だから」

喜び勇んで駆けていくハンゾーに手を振ってから、携帯電話を取り出した。ヒソカとイルミは、特にヒソカは誘うなど事前に強く念を押されているので、これで全員に声をかけた事になる。それにしても陽気なスパイだ。ニンジャとやらの特徴なのだろうか？

「エリス、僕だ」

「アルベルト、どうだった？」

「打ち上げ、ハンゾーは参加するそうだけど、トンパには残念ながら断られたよ。何度か誘ったんだけどね。一人でやけ酒に浸りたい気分なんだそうだ」

「そう、残念ね……。こっちはもうポンズ達と合流できたから、これから買い出しに向かう所よ」

「わかった。会計は僕名義で構わないからね。じゃあ僕は先にホテ

ルに向かつてるよ」
「ええ、お願いね」

ちなみに会場は最終試験の舞台となった協会のホテルではなく、あえて別の場所を選んでおいた。試験が終わった後でいつまでもその気分を引きずるのもどうかと思ったからだ。どの道ライセンスさえ提示すれば冗談みたいな割り引きが受けられるので、反対意見は誰も出さなかった。

それから数時間後、ホテルに集まったメンバーは僕とエリス、ゴンとキルアとクラピカとレオリオ、そしてハンゾー、落選はしたもののポツクルとボンズの九名だった。広いスイートルームのあちこちに料理と飲み物を沢山並べ、思い思いに寛ぎながら交流を深めるという趣旨だった。

料理の中でも目を引くのは、飴色に焼けた七面鳥だった。ゴンが市場で見つけてきたもので、野生に極めて近い状態で放し飼いにされていたという。色艶も匂いも格別だが、味こそがまさに絶品だろう。これの腹にトリュフを真ん丸になるまで詰め込んでオープンで焼いたものを、今宵は五羽も用意してある。これらはボンズの力作だった。

それだけではない。山鼠と豚の肉を合い挽きにして塩と胡桃と香辛料を加え生地で包んで揚げたものはクラピカの出身部族がハレの日に食す伝統料理だったし、ハンゾーは練った中力粉を太く切断した麺にとぐろを巻かせた一本うどんというものを始めとして様々なジャポンの民族料理を並べた。僕が担当したのは魚料理だった。本当に質のいい魚は蒸すべきだというのが僕の持論である。焼くよ

り時間も手間もかかってしまうが、なんとと言っても旨味が逃げない。素材が秘める滋養分を口中で堪能するためには、それが一番合理的な方法だと信じている。エリスに調達してもらった素晴らしい大きさの舌平目は、塩を振られリーキの葉で編んだ草籠に包まれて、柔らかに弾力に富む状態に仕上がった。

キルアの料理は豪快だった。どこからか生きた子牛を連れてきて、瞬く間に解体してしまったのだ。血がほとんど流れない妙技だった。それぞれの部位について下ごしらえが施され、後は食べる際に順次焼いていけばいいという。ホルモン焼きは鮮度が命だというが、ここまで新鮮なのは珍しい。テールだけはエリスが譲り受けて、圧力鍋でシチューにしていた。僕の好物を憶えていてくれて嬉しかった。

ゴンは野性味溢れる品々を用意した。ドングリをたっぷり食べて肥えたりスの干し肉パイ、テラスで燻した川魚、海水を模した塩水で茹でた手長エビ。これは大鍋でざつと湯で上げて、熱々のところにレモン汁を付けてかぶりつくのである。島を訪れる漁師達が好む食べ方だという。それが大皿に山盛りだった。

レオリオは料理というより酒の調達がメインだったが、彼の披露したサラダは好評を持って迎えられた。飛行船乗りのサラダというかつての戦争で軍の飛行船乗り達が出撃前に好んで食べた事から名がついたというそれは、レオリオの国では男の料理の代表格なのだという。

木製の大きなサラダボウルを用意して、新鮮なロメインレタスを手で千切っては次々と放り込む。更に数種類の野菜を入れ、こんがり焼き目のついたクルトン、すり下ろしたチーズ、ベーコン、少量のハーブ、オリーブオイルにワインビネガーとレモン果汁、刻んだアンチョビを加えて混ぜた。こうして瑞々しいサラダがボウルか

ら零れそうなほど溢れた所で、半熟にしたゆで卵をいくつも割つて上から落とした。ほとんど生に近い状態のそれがロメインレタスをとろりと滑り、てらりと濡らした瞬間は、周りで見ていた皆が思わず息を呑むほどだった。

ポツクルが自慢げに振る舞ったのは、故郷に伝わる伝統的なパンの一種だった。小麦粉を練り、発酵をさせずに平たく伸ばして多様な具材と合わせる。本来はこれに油を塗ったものを縦穴式の竈の内側に貼付けて焼くのだそうだが、今回はないためにオーブンを使った。注目すべきは具の多様さだった。羊の挽き肉にトウガラシとトマトを刻んで混ぜ、辛さと酸味が際立つものもあれば、腸詰めやチーズ、ピーマンなどを加えて香辛料で味を調えたものもあった。小麦の生地はぱりぱりに焼け、香ばしい油の匂いが広がった。

エリスは主にオードブルやデザートといった小品を精力的に量産していた。色とりどりの野菜と果実のジュースを若干固めのゼリーに仕立て上げ、味付けした柔らかいゼリーに投じたゼリーサラダ。一度焼いたリングゴにパイ生地をかぶせ、てっぺんの砂糖が溶けかかるまで焼いたタルト・タタン。桃のシロップ煮をバナナアイスとホイップクリームで飾り立て、ラズベリーのジャムをたっぷりとかけて冷やした甘い氷菓。これには周りにもブラックラズベリーが転がされ、賑やかで可愛らしい盛り付けになった。

キルアの思いつきが発端となったこの企画は、想像以上の熱意をもって開始に至ろうとしていた。

「いや、作りすぎでしょ。これ」

呆れながらポンスが言う。広いガラステーブルに料理が所狭しと並べられ、それでも全く足りないのでホテル側に頼んで追加で借り

る必要があつたほどだった。それぞれの皿の間には色鮮やかな草花を生けた花瓶が置かれ、小瓶に入ったキャンドルが料理を官能的に燦らせている。確かに、普通の人間の基準では九人で食べ切るのは無理だろう。しかし目を輝かせる欠食児童達の前では、その心配も無意味なはずだ。

「大丈夫だよ、ほら」

ゴンやキルア、レオリオなどの面子を見渡し僕は言った。ハンゾーなど今にも七面鳥にかぶりつきそうな勢いだった。忍の習性はどつしたのか。まあ、そんな揶揄は不粋だった。

「……マジで？」

「たぶん、マジで」

目を丸くしていたポンスは、しかし第二次試験の光景を思い出したのだろうか、苦笑しながら椅子に座った。そうこうしてるうちに飲み物が配られ、乾杯の準備が進められる。僕はエリスに冷たく煎れたフラワーオレンジペコを手渡すと、自分のために手近な位置にあった白ワインを用意した。つでにとポンスにシャンパンを頼まれる。

エリスはアルコールを飲めないし、僕は飲んでも意味がない。飲んでも酔わない上に、飲まなくてもいつでも酔えるからだ。しかし、こういう席で酒を飲まないと、面倒な事になりかねない。今日集まった人間ならそのような問題はないだろうが、念のため、エリスはともかく、僕は飲んでおくべきだと判断した。

「よし。それじゃあお前ら準備はいいな！　ハンター試験終了と皆の無事を祝してー！」

ビールジョッキを片手にレオリオが乾杯の音頭をとり、ささやかな打ち上げパーティーが開始された。美味しい食べ物、舌の動きを滑らかにする。ハンター試験が終わったという開放感も手伝って、宴は大いなる盛況を見せた。

「二人とも、残念だったね」

こちらに歩いてきたゴンがいう。彼が手にする皿の上には、切り分けた七面鳥とほぐしたヒラメの身が乗っていた。僕の手掛けた品も皆に好評だったようで喜ばしい。

「あ、ん、た、が！ あんたが言うかこんにやろー！」

「ご、ごめんごめん！ 悪かったってホントごめん！」

「私のプレートを返せー！」

……まあ、好評だったようで喜ばしい。

「ポンスはまだいいよ。オレなんかさ、四次試験最後の夜にあいつが現れて」

手長エビを着に、舐めるようにワインを楽しんでいたポツクルが、どこか遠い目をして呟いた。レオリオが訝しげに反応する。

「あいつ？ 誰だよ」

「……ヒソカが」

「よく、殺されなかったな」

クラピカがごくりと唾を飲む。皆も同じ意見らしい。この試験の間に、ヒソカ脅威の認識はすっかり定着したらしかった。しかし見

方によっては彼らは幸運だと言えるのだ。あれほどの実力者の存在を、プロになる前に肌で感じる事ができたのだから。僕はエリス作のテールスープを舌の上で愛でながら、そんなどうでもいい事を考えていた。

「気分がいいからおまけで見逃してやるって……」

プレート一枚とられて気絶させられただけで済んだよ、と肩を落とすポツクルを、皆が次々と慰めている。そうか、僕達と戦った後にヒソカが入手した最後のプレートは、彼から奪ったものだったのか。

ふと横を見ると、エリスが少し気まずそうだった。

そんな一幕もあったものの、時間はおおむね賑やかに流れていく。そしていつしか、話題は自然に今後の展望についてとなった。

「オレは故郷に帰って受験勉強だな。やっぱり医者への夢は捨てきれねえ」

山鼠と豚の包み揚げを飲み込んでから、ソファに身を沈めるレオリオがいう。

「今までハンター試験に集中してたからな。これからは猛勉強しねーとなあ」

「うん、がんばってね」

「おうよ。絶対合格してやるぜ」

国立医大の高額な授業料は、受かりさえすればライセンスの特権で全額免除されるそう。彼がハンター試験を志した主な目的がこれだった。エリスもその決意に耳を傾け大きく頷く。どうやら、彼の目標に大きな共感を得たようだった。

「オレは、まあ。里に帰ってから巻き物探しの旅の準備だな。長老連中に挨拶回りもしなければならんし、これから忙しくなりそうだから。お前らも隠者の書についての情報があったら教えてくれや」

そういつてホームコードの記された名刺が配られる。雲隠流上忍とあるが、恐らく所属する組織だろう。なんとも自己主張の激しいスパイがいたものだ。あ、そうだ、ホームコードといえば。

「クラピカ、いいかな」

「私か？」

「ああ。ヒソカからクラピカのホームコードを教えてくれてメールが届いてるんだけど、どうしようか」

「……黙殺してくれ」

凄く嫌そうに返答された。そこまで嫌なものだろうか。僕など、エリスの事がなければ彼本人にはそれほど悪感情を抱いてないのだが。

「それはそうと、私は雇用主を探すつもりだ。幻影旅団に近い人物に接触するため。皆も旅団について情報があったら教えてくれ。これが私のホームコードだ」

「幻影旅団。クモかな？」

「知っているのか？」

「人並み程度には。ただ、これでもアマチュアのブラックリストハンターとしては繁盛してる方だからね。掘り下げることができそう

な心当たりのいくつかはある。その程度で良ければ後でホームコー
ドに吹き込んでおくけど、軽い気持ちで手を出していい相手じゃな
いよ」

「無論、わかっている。しかし私には必要な事だ」

ハンターになってまで追うとすれば、それはもちろんそうだろう。
僕は軽率だった事を謝罪し、クラピカからも情報について礼をいわ
れた。

「ブラックリストハンター？ あなたが？」

ポンスがぱちぱちと瞬きをしていた。凄く意外そうな顔だった。
他も大体同じようだった。ゴンはよく分かってなさそうだし、キル
アは全く驚いてなさそうだったが。

「意外かな？」

「ちよつと、見えないわね」

そこまで真剣に頷かれると少し困る。エリスが少し拗ねていた。
危険な仕事をしてるという自覚はあるが、そこまで危惧されるほど
の事でもないと思う。まあ、ブラックリストハンターという仕事も
世間では誤解されてる場合が多いから、これも仕方ない事なのだ
ろうか。

ブラックリストハンターといっても、ドラマのように凶悪犯とカ
ーチエイスをしたり銃撃戦を繰り広げるのが全てではない。そうい
う戦闘力に優れた連中と直接戦闘を繰り広げるのは、アマチュアの
極一部とプロの半分程度だ。僕のようなのはむしろ、指名手配を受
けた人間の居場所を突き止めるのが主な仕事だった。

どこにでもある街の、どこにでもあるアパートの、どこにでもある一室に住む、どこにでもある顔の犯罪者。それを探し出すのが僕の仕事だ。そういった業務内容だと、戦闘は止む終えない場合の緊急措置でしかなく、大抵はその国の司法機関か元請けのプロハンターに場所を報告して終わりである。

そんな説明を皆に行い、だいたい納得してもらえたのを確認して、アイスティーで喉を潤す。同じような話は何度もエリスにしているのだが、未だ本心からの同意は得られてない。曰く、もつと安全な職業はいくらでもあるそうだ。それは正真正銘の事実だが、実入りは良いしやりがいもある。そして何より、師匠が若い頃に使っていたこの仕事は、僕にとって特別なものだった。

「オレは、二月ぐらいに一度実家に帰る他は決まってねーかな。ゴン、お前はとうする?」

「オレ? うーん、やっぱり特に決まってるないや。やりたい事は沢山あるけどね。親父を探したり、お世話になった人達に挨拶にいたり、ヒソカにプレート叩き返したり!」

「ヒソカに!?!」

ゴンの当面の目標は凄まじかった。顔面を殴ってお情けで渡された44番のプレートを受け取らせる。傍から見ても、それはあまりにも無謀だった。それでも、不可能とは思わせないから心地がいい。ヒソカも上手い事やったものだ。

「じゃー特訓だなー。どっか適当な場所探して修行すっか」

「え? 遊ばないの?」

「おまえなあ」

じゃれあう二人。仲がいいようで微笑ましい。ゴンと友達になり

たいと語ったキルアの願いも、このままずっと壊されずに続けばいいと思う。

「オレも特訓だな。特に戦闘力を鍛えようと思ってる。今年の試験で思い知ったよ。オレは弱かった。だから負けた。もし何かの拍子で今の状態のままハンターになれたとしても、その弱さがネックになるだろう」

「あ、じゃあオレ達と一緒にいこうよ！ 人数は多いほど面白いからさ。いいよね、キルア？」

「ん？ ああ、いいぜ。よろしく」

「こちらこそよろしく頼むぜ」

ポツクルはゴンたちと同行する事に決まったようだ。輝かしい才能を持つ彼らの成長は、ポツクルにとってもいい刺激になるだろう。それに、今回は僕も思い知った。今までは強さより便利さこそ自己の性能として追求するべきだと考えていたが、強い暴力は、時に全てを駆逐する絶大な便利さを発揮すると。

「あ、私も一緒にいいかしら。最近伸び悩んでて困ってたのよね」
結局、ポنزも加え、四人で当分一緒に行動する事に決まっていた。

「わたしは、うーん。アルベルトがいてくれるならどこでもいいかな」

「はいはい、ごちそうさま。で、あなたは？」

「僕も同じだよ。エリスがいてくれるならどこでもいい。ただ、当面の指針としては、プロとして活動の基盤を再形成する事に力を注ごうと思う。まずは人脈や情報網の見直しかな」

僕の答えは、あまり面白みのないものだったらしい。ゴン達からは一緒に来るよう誘われたし、ハンゾーにも技術指南という名の引き抜きのお誘いを受けた。なんでも、僕ならニンジャとしても十二分にやっていけるとの事だった。それらを丁寧に断ると、話題はやがて別のものに移っていく。

皆はまたまき直しに食べた。食べて、飲んで、大いに寛いで会話を楽しんだ。ポツクルが弓を弦に狩人の唄を披露する。ふけていく夜にぴったりの、楽しくもどこか物悲しい唄だった。あれだけあった料理もいつしか皆の腹へと消えていて、しかし、宴の空気は冷めそうにない。誰かが空きつ腹を訴えた。

「へへっ。そう来ると思って、実はな」

ハンゾーが得意げにもってきたのは、米に具をのせて緑茶をかけたものと、オニギリライスボールに大豆の醗酵ソースを付けて焼いたものだった。お茶漬けと焼きおにぎりという、彼の国の料理らしかった。寂しくなり始めた腹の底に、しんとしみる旨さがあった。

ハンゾーが皆の喝采を浴びた事は、もちろん言うまでもないだろう。

翌朝、集った皆はそれぞれの志を果たすべく、別れを告げてホテルを後にした。

「まずは師匠に報告かな」

「そうね。父さんも心配してるだろうし」

手を繋いだままに大通りを歩く。エリスが楽しそうに笑っていて、それだけで僕は幸せだった。海のそば、丘の上の小さな白い家。子供が二人に犬が一匹。それはきつと無理だけど、いつまでもこの手を繋いでいられたらいいと思うのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3173z/>

コッペリアの電腦（縦書きPDF推奨版）

2011年12月11日08時24分発行